

Hokkaido University News

北大時報

平成25年

1

No. 706 January 2013

佐伯総長 年頭の挨拶

第15回北海道大学-ソウル大学 ジョイントシンポジウムを開催



年頭の挨拶

- 1 総長 佐伯 浩

全学ニュース

- 4 大学入試センター試験の実施
 5 法学研究科 鈴木一人教授がサントリー学芸賞を受賞
 6 第2回北海道大学教育改善マネジメントワークショップを開催
 7 メンタルヘルスファーストエイドを用いたゲートキーパー養成研修会を開催
 8 第15回北海道大学-ソウル大学 ジョイントシンポジウムを開催
 16 北大フロンティア基金
 18 平成24年度第1回北大ペンハロー賞授与式を挙行政
 18 省エネパトロールの実施
 19 人材育成本部上級人材育成ステーションで「赤い糸会&緑の会」を開催

部局ニュース

- 20 医学研究科・医学部及び保健科学研究院・保健科学院が台湾 台北医学大学と部局間交流協定を締結
 20 保健科学院・保健科学研究院がインドネシア Diponegoro 大学及びDr. Kariadi病院と部局間交流協定を締結
 21 保健科学院が独立行政法人放射線医学総合研究所と大学院連携協定を締結
 22 歯学研究科がデンマーク オーフス大学歯学部と部局間交流協定を締結
 22 地球環境科学研究院が「北国の省エネ・新エネ大賞」を受賞
 23 文学研究科人間システム科学専攻が「卓越した大学院拠点形成支援」に採択
 23 メディア・コミュニケーション研究院公開講座「世界のリーダー交代を考える」が終了
 24 農学研究院で平成24年度第3回FD研修会を開催
 24 低温科学研究所技術部で第18回技術報告会を開催
 25 「法科大学院に関するアドバイザーグループ会議」を開催
 25 附属図書館で「AED講習会」を開催



ゲートキーパー養成研修会



北海道大学-ソウル大学
ジョイントシンポジウム

- 26 平成24年度 北海道大学薬学部合同企業セミナーを開催
 26 「平成24年度北海道大学工学系産業技術フォーラム」を開催
 27 函館キャンパス体育館で「水産学部・水産科学院主催企業セミナー」を開催
 28 ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～ KAKENHI「ようこそ不思議な細菌の世界へ！～身の周りの細菌を見てふやして感じてみよう～」を開催
 29 北海道大学病院でクリスマスコンサートを開催

博士学位記授与 30

レクリエーション

- 32 方円会が北大囲碁部との交流会を実施
 -全日本学生囲碁選手権大会に向けて「檄を飛ばす会」-

研修

- 33 平成24年度北海道地区国立大学法人事務情報化講習会 (Access 初級編・クエリ編・中級編)
 33 平成24年度北海道地区国立大学法人等学生支援担当職員SD研修

諸会議の開催状況 34

学内規程 35

表敬訪問 36

人事 37

- 39 新任部局長等紹介
 39 新任教授紹介

訃報

- 40 名誉教授 藤本 征一郎 氏
 40 名誉教授 恩村 雄太 氏



保健科学院・保健科学研究院
部局間交流協定締結



地球環境科学研究院
「北国の省エネ・新エネ大賞」受賞



薬学部合同企業セミナー



保健科学研究院
ひらめき☆ときめきサイエンス

年頭の挨拶

北海道大学総長 佐 伯 浩



新年明けましておめでとうございます。平成25年の年頭にあたり、教職員、学部・大学院生の皆様方に、新年のご挨拶を申し上げます。

北海道大学が法人化され、満9年になろうとしています。この間、運営費交付金は約10%削減され、さらに大学病院の経営改善係数による負担等があり、本学の財務状況も厳しい状態が続いています。第1期中期目標期間には、教職員数が5%削減された中で、人件費の抑制、諸経費の節約、競争入札制度の幅広い導入、北海道内国立大学法人による共同発注や資金の共同運用等、節約に励み、また無駄を抑えることにより、留学生のための寮の充実及び学生支援のための体育施設や食堂等の充実を可能とすることができました。あらためて、全教職員の皆様方の努力と叡智に、心より感謝申し上げます。

あと3ヶ月で第2期中期目標期間の3年目が終わろうとしています。この第2期の本学の全ての活動を包括する4つの基本目標のうち、2つが本学のさらなる国際化に向けた目標であります。1つ目は「世界水準の人材育成システムの確立」であり、2つ目は「世界に開かれた大学の実現」です。大学の国際化を加速させねばならない主たる原因は、この20年間に、ベルリンの壁の崩壊を契機として、数多くの国々が市場主義経済に大きく舵をきったこと、加えて中国の急成長と市場主義経済への参入、そしてICT（情報通信技術）の急速な発展による国際的な政治・経済の枠組の劇的な変化であると言われています。EU圏においては、2008年のリーマンショック、それに続くギリシャの財政政策の失敗が他のEU諸国に波及することになり、今やグローバルな不況に陥る可能性も出てきています。このように、一国の経済の変化は、他の国々の政治・経済と相互に影響し合うことになっています。

商社マンとして海外で長く勤務され、イタリアの大学、米国のビジネススクールでも学ばれ、現在、日本ユニシス株式会社の特別顧問をされている国際経験豊かな鳥田精一氏の講演によりますと、現在の我が国の上場企業の利益の70%は海外活動の結果であり、それらの企業が外国に所有する資産は、2008年には2.9兆ドルと世界一になっているとのことです。さらに我が国の企業の現地法人数は、この10年で50%近く増えているとのことです。このような状況において、企業の経営者が期待する人材像は以下のようになります。1. 雇用環境の大きな変化（グローバル化）について理解する人。2. 自ら考え、自ら調べ、自ら実行できる人。3. 一般教養と専門分野の深い知識を持つ人。4. 自分の適性をよく知り、社会に出て何をしたいかを見つけられる人。5. 旺盛な好奇心を持ち、タフな行動力を持った人。一言で言えば、「自己アイデンティティとグローバルな理解力を持った人」となるそうです。そのためには、できるだけ若いうちに留学し、外国の若い人々との多くの交流を通して、異文化を肌で感じる事が重要であると述べておられます。鳥田氏の言われる人材像は、大学と産業界のメンバーで構成されている「産学協働人材育成円卓会議」での、「世界を舞台に活躍できるグローバル人材」の人材像とも、ほぼ一致しています。

本学でも、大学の国際化を加速すべく努力してまいりました。諸外国の大学等との学術交流・学生交流協定の数も増加し、本学で学ぶ留学生数も着実に増え、現中期目標である、本学全学生数の10%、1,800人にあと300人となっています。各部署及び先生方のさらなる努力に期待いたします。

さて、このような状況下で、本年度は文部科学省の国際的な人材育成等を目指した2つの事業に、本学の提案したプロジェクトが採択されました。ひとつは「グローバル人材育成推進事業」で、グローバル人材を養成する「新渡戸カレッジ」の創設であります。この事業は本年4月から実質的に開設され、入学者の中から希望者を募り、最終的には1学年200名を語学能力で選抜することになります。カレッジ生には在学中、原則として1セメスター（半年）から1年間の海外留学を義務づける（部局によっては、短期留学を含む）とともに、留学支援英語、英語による専門科目の講義、本学の北方生物圏フィールド科学センターの施設等を活用したフィールド体験型実習、多文化交流・異文化理解促進科目、日本文化・社会に関する理解促進科目、それにボランティアやインターンシップ等の実社会経験等15単位を、正規科目以外に履修することが義務づけられます。これらの科目には、チームワーク力やリーダーシップ力の育成を目的としたものも含まれています。さらに、20人の少人数クラス毎に本学教員が担任となり、同時に、社会で活躍されている本学同窓生にメンターとしての役割を担ってもらっています。この新渡戸カレッジが着実に発展するためには、全学の教職員の方々の協力が是非とも必要です。

もうひとつの事業は、ASEAN諸国との大学間交流形成支援を目的とした「大学の世界展開力強化事業」です。この取組には、本学の農学院、環境科学院、水産科学院、工学院、情報科学研究科と、サステナビリティ学教育研究センター等の学内教育研究センター、それに国際本部などが参加しています。これはASEAN地域における人口、活動、資源、環境における問題を解決するというフロンティアを担う人材育成のために、インドネシアとタイの6つの協定校との国際連携教育システムの構築を図ることを目的としたものです。フィールド研究力、多様性容認力、開拓力及び課題解決力を備え、ASEAN地域の発展に主導的な役割を担うことのできる人材の養成を目的としたもので、平成24年度は、派遣及び受入れ学生26名、平成25年度以降は60名となる予定です。このプロジェクトの推進に当たっては、成績評価の共通化等、高等教育の質保証についての成果も期待されています。

また、本学大学院の教育においては、英語のみによる教育プログラムのさらなる強化が望まれていますし、我々全教職員、学生が丸一となって国際化に向けた努力を加速すべき時となっています。

研究者の方々は良くご存知のとおり、平成7年、我が国における科学技術の水準の向上を図り、経済社会の発展と国民の福祉の向上に寄与し、世界の科学技術の進歩と人類社会の持続的発展に貢献することを目的とする高い理念の下に、科学技術基本法が制定されました。その法律に基づき、3期15年にわたって科学技術基本計画を策定しました。その実行に際しては厳しい財政状況の中にあっても研究開発への投資の拡充が図られ、世界をリードする研究成果や実績があげられてきました。この間、本学の研究者も多くの恩恵を得てきました。一方で、我が国のGDPは伸び悩み、環境や医療等においても多くの課題を抱え、我が国は科学技術の成果を新産業や雇用の創出、国民の福祉向上、さらには一昨年の大災害への対応など、社会問題の解決に必ずしも生かされていなかったとの指摘もあります。昨年度からの5ヶ年を対象とする第4期科学技術基本計画の策定に当たっては、政策の役割を、科学技術の一層の振興を図ることはもとより、人類社会が抱える様々な課題への対応を図るためのものとして捉えています。重要なことは、科学技術政策を国家戦略の根幹と位置づけ、他の重要政策と密接に連携しつつ、科学技術によるイノベーションの実現に向けた政策展開をしていくということで、社会保障関連予算以外では唯一、予算の減額はありませんでした。我が国が科学技術の発展に命運をかけていると言っても過言ではありません。

ところが一昨年の7月、本学の取引先業者に本学の研究費の預け金と思われる金銭処理があることが、札幌国税局より指摘されました。早速、一昨年の12月に、本学の規程に依り、学外委員（弁護士、公認会計士）2名を含む5名体制で「不正使用調査委員会」を設置しました。その後、弁護士2名、公認会計士2名の4名を新たに追加し、9名体制で調査を進めてまいりました。昨年12月に開催の教育研究評議会において、「公的研究費の不適切な経理処理に関する中間報告」がなされ、翌々日の21日にはプレスリリースを行いました。中間報告では、不適切な経理処理があったと事実認定された教員は35名で、預け金、品名替えの総額は約2億2,400万円でした。本学では、平成16年以降、不正使用防止のため、諸規程の整備、不正使用の通報窓口の設置、「科学者の行動規範」の策定等、再発防止に向けた取組がなされてきたことを思うと、今回の調査結果は残念でなりません。大学は教育研究を通して、未来の社会を担う有為な人材の養成の場であり、教職員は当然のことながら、自らの行動を律するとともに、学生諸君の信頼を得るよう、日常的に心がけるべきであります。このような事案が二度と起こらないことを願うとともに、再発防止に万全の体制で臨みたいと思います。

さて、一昨年の6月の「国家公務員の給与減額支給措置について」の閣議決定以降、同年10月には、独立行政法人も国家公務員と同様の措置を講ずるようとの要請が閣議決定されました。その後、昨年5月には副総理から、独立行政法人における給与減額措置を急ぐようにとの発言がありました。また、国立大学協会の政策会議等においては、文部科学省から、減額した分は大震災の復興予算に使われることと、2年間の措置であることが度々説明されました。そして、早急な給与減額への協力が要請されました。給与減額は、国家公務員と同様、平均7.8%の引き下げとされ、本学においては昨年7月から実施することにいたしました。政府は我が国の経済の発展にかかわるイノベーションの創出と我が国の国際社会の中でのリーダーシップを取れるような人材の養成を大学に期待しながら、一方で給与を減額するといった政府の措置は、教職員のモチベーションの低下に繋がりがかねない状況に陥ることが懸念されます。しかし、我が国の現在の財政状況、一昨年の大震災と原子力発電所の事故からの早急の復興、それに同じ国立大学法人も大きな被害を受けたことを鑑み、給与減額を決定いたしました。あらためて教職員の皆様の御理解をいただきたいと思っております。

我が国の財政危機への対応と失われた20年とも言われる昨今の我が国の状況を克服するため、大胆な大学改革が昨年開始されました。各国立大学法人の学部等の壁を越えた改革や、複数の国立大学法人の統合あるいは一法人が複数の大学で構成されるといったことも想定されています。

国立大学法人の設置目的と本学の理念、そして大学本来の持つべき機能に基づき、本学で働く教職員が将来に向かって希望を持てるような改革、学部・大学院生の諸君が本学で学び研究できることに喜びを持てるような改革が必要と考えます。また同時に、改革を迫る側の組織が真に無駄のない機能的な組織になっているかの検証も実施して欲しいと思っています。

最後になりましたが、平成25年が本学の将来に向けての輝かしい第一歩になることを願いますとともに、教職員及び学部・大学院生の皆様のご多幸と発展を心より願い、新年の挨拶とさせていただきます。

新年交礼会の様子

1月7日（月）、佐伯総長の年頭の挨拶とともに、新年交礼会が始まりました。会場となった百年記念会館大会議室には、役員、部局長等が大勢集まりました。



乾杯の発声をする本堂武夫理事・副学長

■全学ニュース

大学入試センター試験の実施

平成25年度の大学入試センター試験が、1月19日(土)・20日(日)の両日、全国一斉に実施されました。

本学においても、大学入試センター試験実施体制により、実施本部、総務部、試験場部、救急医療部、連絡部及び広報部を設置し、本学教職員等約1,200人の協力を得て、平穩のうちに終了しました。

全国の志願者は、前年度より17,807人増加し573,344人でした。道内の志願者は、前年度より173人増加し19,938人となりました。

本学が担当する試験場(藤女子大学試験場を含む)の志願者数は、昨年より264人多い6,176人で、各試験場(会場)の受験状況は次のとおりです。



受験風景

(学務部入試課)

各試験場(会場)の受験状況

日程 教科 試験時間 試験場(会場)名・志願者数	1月19日(土)										1月20日(日)							
	地理歴史、公民				国語		外国語【筆記】		英語【リスニング】		英語【リスニング】再開テスト		理科			数学①		数学②
	地理歴史、公民(2科目受験者)		地理歴史、公民(1科目受験者)										理科(2科目受験者)		理科(1科目受験者)			
	9:30~11:40	10:40~11:40	-	13:00~14:20	15:10~16:30	17:10~18:10	18:45~19:15	9:30~11:40	10:40~11:40	-	13:00~14:00	14:50~15:50						
受験した者の数	受験した者の数	欠席した者の数	受験した者の数	欠席した者の数	受験した者の数	欠席した者の数	受験した者の数	欠席した者の数	受験者数	辞退者数	受験した者の数	受験した者の数	欠席した者の数	受験した者の数	欠席した者の数	受験した者の数	欠席した者の数	
北海道大学試験場	農学部会場	760	674	0	86	718	42	737	23	722	38	0	707	53	705	55	681	79
	人文・社会科学総合教育研究棟会場	793	300	175	318	652	141	665	128	635	158	98	269	426	434	359	322	471
	理学部会場	483	465	0	18	469	14	470	13	468	15	0	447	36	453	30	448	35
	工学部会場	736	0	624	112	662	74	686	50	664	72	528	0	208	546	190	509	227
	高等教育推進機構A会場	948	0	906	42	910	38	913	35	911	37	907	0	41	907	41	897	51
	高等教育推進機構B会場	1,000	0	855	145	934	66	942	58	937	63	935	0	65	939	61	856	144
	高等教育推進機構S会場	600	0	439	161	531	69	535	65	476	124	0	163	437	159	441	68	532
	高等教育推進機構N会場	7	1	4	2	6	1	6	1	6	1	3	1	3	4	3	3	4
藤女子大学試験場	500	102	278	120	438	62	445	55	440	60	246	123	131	365	135	323	177	
札幌地区 小計		5,827	1,542	3,281	1,004	5,320	507	5,399	428	5,259	568	2,717	1,710	1,400	4,512	1,315	4,107	1,720
			82.8%		17.2%	91.3%	8.7%	92.7%	7.3%	90.3%	9.7%	76.0%		24.0%	77.4%	22.6%	70.5%	29.5%
北海道大学水産学部試験場	349	65	186	98	277	72	288	61	286	63	175	63	111	249	100	231	118	
合計		6,176	1,607	3,467	1,102	5,597	579	5,687	489	5,545	631	2,892	1,773	1,511	4,761	1,415	4,338	1,838
			82.2%		17.8%	90.6%	9.4%	92.1%	7.9%	89.8%	10.2%	75.5%		24.5%	77.1%	22.9%	70.2%	29.8%

*欠席した者の数には無登録者も含まれる

法学研究科 鈴木一人教授がサントリー学芸賞を受賞



各部門の受賞者とともに記念撮影（2列目の左から2人目、鈴木教授）



鈴木教授による受賞スピーチ

12月11日（火）、法学研究科の鈴木一人教授に、公益財団法人サントリー文化財団よりサントリー学芸賞（政治・経済部門）が授与されました。

この賞は、前年1月以降に出版された著作物を対象に選考され、広く社会と文化を考える独創的で優れた研究・評論活動をされた方に対し贈呈される賞であり、今回が第34回目にあたります。

鈴木教授の著作「宇宙開発と国際政治」（岩波書店、2011年）は、従来何人も踏み入ることのなかった「巨大技術と国際政治」という領域に分け入り、宇宙を領域としてその政治的意義を解明したパイオニア的作品として高く評価され、今回の受賞に至りました。

鈴木教授は、昭和45年長野県上田市に生まれ、平成7年立命館大学大学院国際関係研究科修士課程を修了、同13年英国サセックス大学ヨーロッパ研究所博士課程を修了しました。その後、筑波大学大学院人文社会科学研究所国際政治経済学専攻助教を経て、平成20年に本学公共政策学連携研究部附属公共政策学研究センター准教授に着

任、現在、法学研究科教授として在外研究を行い、プリンストン大学国際地域研究所で客員研究員を務めています。

この著作において、鈴木教授が明らかにしたことは以下のとおりです。

宇宙とは従来、人類が未来技術を開発させ、夢を描き出す空間であり、そこは物理法則しか通用せず、人間の存在は塵のように小さな存在にすぎない空間とみなされていました。

しかし、20世紀後半、米ソ超大国はミサイル開発競争など、宇宙をひとつの戦場とした無数の兵器体系を開発して、「宇宙戦争」を展開してきました。鈴木教授は、この権力政治体系を「ハード・パワー」としての宇宙システムという枠組みから説明します。

また、21世紀の今日、すでに60以上の国々が、人工衛星を宇宙空間に飛ばして技術水準の高さを誇示していますが、この国家威信の発揚空間としての宇宙を、鈴木教授は「ソフト・パワー」として宇宙システムという枠組みを導入して説明しました。

本書の本領は、この2種類のパワーによる宇宙の分析にとどまりません。

第3の枠組みとして鈴木教授は、「社会インフラ」としての宇宙という枠組みを提示し、情報通信や気象観測、GPS（Global Positioning System）測位に宇宙が活用されている点を分析しています。同教授によれば、東日本大震災に際して唯一の通信手段を提供したのも、また津波の被害を全域にわたって克明・刻々と撮影したのも宇宙の人工衛星でした。

宇宙政策には膨大な国の財政が投下され、鈴木教授の提示した「ハード・パワー」「ソフト・パワー」そして「社会インフラ」の3本の糸が織りなす文様を作り上げ、宇宙に関するグローバルなルール作りが進行しています。それにもかかわらず、日本の宇宙政策はいまだ「夢」と「希望」の空間という神話的願望に支配され、グローバルなルール作りに遅れをとっています。

今後、鈴木教授が構築した枠組みによって、宇宙政策と科学技術政策に対して、より深い理解に基づき接近できることを心より喜びたいと思います。

（法学研究科・法学部）

第2回北海道大学教育改善マネジメントワークショップを開催

高等教育推進機構では、11月30日（金）及び12月1日（土）の2日間にわたり、同機構の会議室を会場に、中堅教員を対象として、第2回教育改善マネジメントワークショップを開催しました。

本ワークショップは、これまで本学で実施してきた新任教員向けFD「教育ワークショップ」の経験をもとに開発されたプログラムで、主に教育改善マネジメント能力の習得を目的とした研修です。

第2回目となる今回は、「大学の国

際化」をメインテーマとして、「新渡戸カレッジ」を例に具体的な教育改善手法の基礎を身につけることを目指しました。

開催にあたり、山口佳三理事・副学長から挨拶があった後、本堂武夫理事・副学長から新渡戸カレッジの説明が行われました。本ワークショップに参加した本学教員19名は、教育の管理運営に関わる基礎的な講義を受講するとともに、複数のグループに分かれて行われたグループ討論で活発な議論を交わしながら、具体的な教育改善計画

を作成することにより、教育改革の実行方法等について学びました。

ワークショップを終えて、参加者からは、「所属の異なる教員と意見を交流させ、種々の意見を聞くことができた」、「教育のみならず事業体としての業務をマネジメントしていく方法論を学べた」、「もう少し自由度が高くても良かったのでは」等の感想や意見が寄せられました。

（高等教育推進機構）

1日目の主なプログラム

- 検討課題の提示 「新渡戸カレッジと課題」
- ミニ講義1 「課題の把握とニーズ・背景・課題の解析と意志決定」
- ワークショップ1 「課題のニーズ・背景の把握」
- ミニ講義2 「目標管理とチームワークの方法」
- ワークショップ2 「目標管理：課題解決への組織的目標設定」
- ミニ講義3 「戦略1：チームによる目標達成への行動計画・役割分担」
- ワークショップ3 「戦略1：チームによる目標達成への行動計画・役割分担」
- 中間反省会

2日目の主なプログラム

- ミニ講義4 「戦略2：担当教員の役割目標と行動計画・役割期待」
- ワークショップ4 「戦略2：担当教員の役割目標と行動計画・役割期待」
- ワークショップ5 「戦略1・2の統合：個人業務、大学・学部、学科業務の統合作業」
- ミニ講義6 「成果確認と評価・発展」
- ワークショップ6 「課題対応の発展」
- 総合討論、まとめ



ワークショップ参加者



グループ討論での発表の様子

メンタルヘルスファーストエイドを用いた ゲートキーパー養成研修会を開催



グループでの模擬演習の様子

9月26日（水）から12月13日（木）まで、保健センター主催の「メンタルヘルスファーストエイドを用いたゲートキーパー養成研修会」を4回開催（1回の定員20名）しました。本研修会は、メンタルヘルスの危機にある学生の初期対応からカウンセラーや専門医等への橋渡しまでの、当該学生との接し方等に関するスキル習得を目的としたものです。

研修前半は、講師である保健センター精神科医の橋本直樹先生による「自殺とこころの病気」の講義で始まりました。講義では、オーストラリアで開発され、世界各国で翻訳されている「メンタルヘルスファーストエイド」という技法をもとに、メンタルヘルスの危機にある学生への対応ノウハウを5つのステップ「リスク評価」「はんだん・批評せずに聞く」「あんしん・情報を与える」「サポートを得るように勧める」「セルフヘルプ」に沿って身近な事例を挙げつつ、詳細な説明がありました。また時折、参加者に意見・

感想を求めるなどして進行し、参加者は終始興味深く受講していました。特に「リスク評価」にあっては、「死にたいと思っていますか?」「実行する手段を考えていますか?」とはっきり尋ねてみるとの説明があり、年配の参加者からは、従来避けていた「死」または「自殺」等の単語を使うことについて、驚嘆の声も聞かれました。

後半は、学生対応の悪い例、良い例がビデオで提示され、最後に参加者が3～4グループに分かれ、それぞれのグループに保健センターの精神科医または臨床心理士がアドバイザーとして配置され、参加者が学生役、職員役となって学生対応の模擬演習を行いました。学生役は「就職を苦に・・・」との想定でしたが、参加者からは留年や大学・学部 mismatch 等で修学意欲を失くした学生を想定した場合の対応などについて、質問・意見交換がなされ、予定時間をオーバーすることも度々で、4回の研修で各部局の教務系職員を中心に事務局学務部教務課・学生支



講義する橋本先生

援課の職員及び保健センター看護師等78名が受講しました。

なお、研修会で提示のあったビデオについては、内閣府ホームページ（自殺対策）に掲載されていますので、一度ご覧いただき学生支援・指導の一助としていただければ幸いです。

◆<http://www8.cao.go.jp/jisatsutaisaku/kyoukagekkan/gatekeeper-yousei2.html>

（学務部学生支援課）

第15回北海道大学-ソウル大学 ジョイントシンポジウムを開催



全体会参加者全員での集合写真

12月6日（木）から8日（土）の3日間にわたり、第15回北海道大学-ソウル大学ジョイントシンポジウムを本学において開催しました。本学とソウル大学は、1997年に大学間交流協定を締結し、これを記念して1998年に第1回合同シンポジウムを札幌で開催して以来、毎年交互に当番校となって合同シンポジウムを開催しており、今年で15回目となります。

12月6日（木）に開催された全体会では、テーマを「Action for a Sustainable Campus」とし、本学 佐伯 浩総長及びソウル大学 Yeon-Cheon OH総長の挨拶に続き、本学工学研究院 長野克則教授、ソウル大学 Jong Won LIM名誉教授による基調講演が行われました。また、基調講演終了後には、本学の学生サークル「邦楽研究会」による演奏が行われました。

全体会に加え、シンポジウム期間中（一部のものを除く）には、様々な分野において、14に及ぶ分科会が開催され、それぞれの分野において、教員、研究者、学生等による研究発表や活発な意見交換が行われました。なかには、本学やソウル大学以外の機関から参加があった分科会もあり、より広い観点からの議論を行うことができました。

第15回目を迎えた本シンポジウムは、質・量ともに充実し、教員だけでなく、若手研究者や学生にとっても研究成果を発表するための貴重な機会となり、本学とソウル大学との交流促進の大きな原動力となりました。今後も本シンポジウム開催を通じて、韓国屈指の有力大学であるソウル大学との連携・協力関係を強化していきます。

（国際本部国際連携課）



記念品を交換する佐伯総長(左)とOH総長(右)



佐伯総長による全体会挨拶



工学研究院 長野教授による基調講演



学生サークル「邦楽研究会」による演奏

分科会1

2nd Joint Symposium on Public Health and Sustainability

第2回パブリックヘルスとサステナビリティに関するシンポジウム／医学研究科 特任教授 玉城英彦

12月7日（金）、医学部管理棟大会議室において、第2回目となる本分科会を開催しました。本分科会は、サステナビリティ・ウィーク2010における本学医学研究科とソウル大学公衆衛生大学院との交流をきっかけとして企画されたものです。

本学での開催となった今回は、ソウル大学からHo Kim公衆衛生大学院副研究科長をはじめ教員2名と大学院生3名が来札し、前半を両大学の教員によるセッション、後半を大学院生やポスドクなど若手のセッションという2部構成としました。環境保健から国際保健、さらには情報可視化や携帯電話機器、モバイルネットワークなどの情報技術の活用など、多岐にわたるテーマについて約30名の参加者による活発な討論が行われました。この若手セッションを設けたことは、今後の持続的な交流を促進する意味でも効果的な試

みであったと考えます。

分科会での活発な討論を通じ、双方の研究成果及び研究領域の相互理解が促進され、また協同の研究計画の議論も行われました。今後も、分科会の主

テーマに掲げた両大学による公衆衛生の持続的な研究・教育の発展に寄与すべく、次回の分科会の開催をはじめとして、より持続的な交流をしていく予定です。



Hokkaido University - Seoul National University
15th Joint Symposium - Satellite Session



2nd Joint Symposium on Public Health and Sustainability - Selected Key Issues on Public Health Research -

Hokkaido University Graduate School of Medicine
7th December 2012 Sapporo, Japan



参加者による集合写真

分科会2

Japan - Korea International Symposium in Ophthalmology

第7回日韓眼科シンポジウム／医学研究科 准教授 南場研一

11月19日（月）午後5時から、医学研究科中央研究棟3階セミナー室において、分科会「第7回日韓眼科シンポジウム」を開催しました。本学から教員8名、医員7名、大学院生6名が参加し、ソウル大学からHyeong Gon Yu教授、Chang Ki Yoon先生が参加されました。開会の挨拶の後、本学医学研究科 石田 晋教授による「黄斑上膜・黄斑円孔に対する硝子体手術後の網膜外層厚の増加」についての講演、また、ソウル大学 Yu教授による「高分圧酸素網膜症におけるプロテオソーム解析」に関する講演が行われました。

その後は各10分の演題が本学から7題、ソウル大学から2題発表されましたが、興味深い演題が多く活発な議論がなされ、予定時間を1時間延長してシンポジウムが行われました。同じアジアで臨床研究・基礎研究に真摯に取り組んでいる姿勢に若い日本の眼科医も良い刺激を受けたことと思います。

シンポジウム後の懇親会では、双方の眼科医療事情や生活習慣の違いなど楽しく議論し親睦を深めることができました。また、翌20日（火）には、ぶどう膜炎の難治症例について症例検討会を行い、本学から3症例、ソウル大

学から2症例の呈示がなされ、こちらも活発な討論を行うことができました。

来年はソウルにて第8回日韓眼科シンポジウムを行う予定です。



分科会参加者による集合写真

分科会3

The leading edge of veterinary clinical sciences

臨床獣医学研究の最前線／獣医学研究科 教授 滝口満喜, 教授 奥村正裕

12月7日（金）午前9時30分から、獣医学研究科講義棟講堂において、獣医学研究科の分科会を開催しました。本学 伊藤茂男獣医学研究科長とソウル大学 Pand Dong Ryu学部長の開催の言葉に続き、ソウル大学 Inhyung Lee准教授より同大学が教育基盤を整備し、アメリカ獣医学会の承認を得るという試みについて紹介がありました。

今回は各大学から4名ずつの教員8名が発表を行い、臨床獣医学の分野から画像診断、臨床応用を目指した基礎的な実験などについての報告があり、非常に活発な議論がなされました。本分科会には全体で41名の参加者があ

り、2大学における臨床獣医学の先端を担う教員の研究成果に耳を傾けていました。

今回、大学院生の招聘を行わなかったため学生に発表してもらう機会が少なく、今後このような機会を国際学会発表の基礎とするべく大学院生の参加も積極的に促すべきと思われましたが、質疑には学生から積極的に発言がありました。懇親会では、本学 滝口満喜動物病院院長より新病院のコンセプトが報告され、またこれを題材に情報交換がなされました。

来年度以降は、引き続きトピックを変えながら取り組んでいく予定です。



伊藤研究科長の挨拶



分科会の様子

分科会4

New Frontiers in Convergence Science and Technology

第3回 総合情報科学技術の最前線／情報科学研究科 教授 原口 誠

本分科会は、昨年度ソウル市で開催された第2回コンバージェンス科学技術フロンティアに関する合同シンポジウムを受け、本年度も継続して開催したものです。参加者は、本学情報科学研究科から14名（非常勤講師2名、学生1名を含む）、ソウル大学から11名（学生3名を含む）であり、12月7日（金）に工学研究院アカデミックラウンジA3及び情報科学研究科ミーティングルームで実施しました。

情報科学及びコンバージェンス科学技術が対象とする分野は多岐にわたることから、分科会もIT及びナノ・バイオ・デバイスに関するパラレルセッション構成として、これを午後の時間帯に組み込みました。一方、これらの領域に依存しないテーマとして、プロジェクトマネジメント教育に関する特別セッションを午前の時間帯に開催しました。特別セッションでは、ソウル大学のHyun-Soo Lee教授から、同

大で実施中のグローバルなエンジニアリングプロジェクトマネージャー（PM）育成のための教育プログラムについて講演があり、また、本学情報科学研究科の大学院特論講義を担当している濱久人講師から、PM教育の現状について報告がありました。午後のセッションでは、多くの参加者は初対面であったにも関わらず活発な討議がなされ、

今後の交流深化に向けてカウンターパートを見出すことができたのは大きな成果でした。

本研究科もソウル大学コンバージェンス科学技術研究科も多様な分野を抱えており、潜在的な交流の可能性はさらに高まると思われ、次回のシンポジウムが期待されます。



参加者の記念写真

分科会5

Future and Risk of Our Environment

環境シンポジウム「環境の未来とリスク」／地球環境科学研究院長 嶋津克明

12月7日（金）、地球環境科学研究院D201室において、本分科会を開催しました。

分科会は、まず本学の嶋津克明地球環境科学研究院長による歓迎の挨拶で始まり、その後、ソウル大学のKyung-Ryul Kim教授には「Current status of greenhouse gas monitoring at Gosan, Jeju Island（済州島ゴサンでの温室効果ガスモニタリングの現状）」という題目で、Guebuem Kim教授には「Overview of recent studies on submarine groundwater discharge in the coastal ocean（沿岸域海底からの地下水湧出に関する最近の研究概説）」という題目で基調講演を行っていただきました。

これらの講演に加え、本学環境科学院とソウル大学地球環境科学科の研究生・大学院生が、環境に関する様々な研究について発表しました。本学から5名が、ソウル大学からは4名が口頭発表し、大気圏、陸圏、海洋の化学物

質の動態や環境問題解決のための技術開発から、更には社会科学的な内容まで、発表内容は広範囲にわたりました。特に本学環境科学院のOBで、現在ソウル大学の博士研究員として活躍中のChungwan Lim博士は、熱の入った講演をしてくださいました。各自の発表に対して、双方の教員が教育的な見地から質問やコメントをしましたが、分科会の後で学生に聞くと貴重な体験になったようです。大学院生の発表に対する質疑応答に時間制限を加えなかったこともあり、プログラムで予定していた時間を大幅に超える分科会となりました。

今回はソウル大学から6名の参加となりましたが、本学側からは教員・博士研究員・大学院生が多数出席しました。最後に来年度分科会の見通しなどについてKyung-Ryul Kim先生と本学地球環境科学研究院 吉川久幸教授が話をし、分科会を終了しました。



両大学職員と発表者の集合写真



分科会の様子

分科会6

Biomolecular Approach for the Understanding of Biochemical Processes

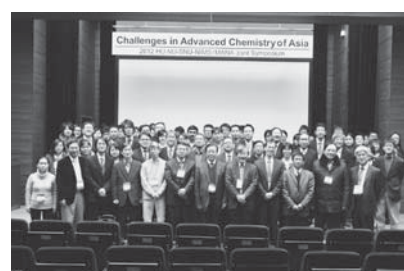
化学的過程の解明に向けての生体分子論的アプローチ／理学研究院 教授 石森浩一郎

平成24年度総長室事業推進経費の国際研究集会等開催支援による国際シンポジウム「Challenges in Advanced Chemistry of Asia」の一部として本分科会を、12月6日（木）・7日（金）に、国内外の100名以上の参加者を集めて学術交流会館講堂で開催しました。ソウル大学からは教員4名、大学院生4名が参加し、教員はシンポジウムにおいて基調講演と招待講演を行い、神経における刺激伝達の化学的解析、生体試料の微量分析、生体関連物質検出のための新規化学センサー、浸透圧を用いた新規脱塩法の開発など、生化学的に興味深い化学反応過程に関する最新の成果を発表しました。

本学の研究者もこれらの研究テーマに関連する研究成果を発表し、しばし

ば制限時間を超えての熱心な質疑・応答が交わされるなか、今後の相互訪問や共同研究の提案も出され、双方に取って実り多いシンポジウムとなりました。

さらに、8日（土）に札幌の定山溪で行われたポストシンポジウムでは、ソウル地方の悪天候のため札幌到着が遅れた大学院生4名が、日本や中国の若手研究者や大学院生19名とともに口頭発表を行い、ソウル大学のIn Hye SungさんがBest Presentation賞に選ばれました。その後の懇親会では、会場のあちこちで日中韓の大学院生が英語で生き生きと歓談する光景が見られ、Scienceでのつながりだけでなく、多くの個人レベルでの交流も生まれました。



基調講演、招待講演、ポスター発表者の記念写真



Best Poster賞とBest Presentation賞の受賞者

分科会7

Recent Developments of Geometry and Topology

幾何とトポロジーの関連分野における最近の進展／理学研究院 准教授 松下大介

ソウル大学から6名の研究者を招き、幾何とトポロジーを主題として、12月7日（金）に理学研究院3-309教室で本分科会を行いました。

扱われた話題は代数構造のなす圏、特異点を持つ多様体の特性類、剛性問題、多重イデアル、関数体上のFord円、Farey 写像、Chern-Simons理論と3次元多様体の不変量、ミラー対称性、統計多様体など多岐にわたりました。1日という限られた時間であったため、45分間の講演を8コマという小ささか厳しいスケジュールとなりましたが、本学とソウル大学、双方の幾何関

係の研究者の仕事を互いに知る良い機会になったと思います。また、普段一緒に仕事をしているが、研究上の交流が少ない同僚の研究内容を知る良い機会でもありました。

昼食会及び懇親会では今後のことについて話し合いました。次回開催時には代数を主題としてやってみてはどうか、今回は時間の制約により教員の発表のみとなってしまったが、次回は学生に発表させる機会を設けたいなどの意見が出て、この形での双方の数学教室の交流をこれからも続けていくことが確認されました。



分科会の様子

分科会8

Frontier of Nucleic Acids Medicine based on Nanobioscience

ナノバイオが先導する核酸医薬の新展開／薬学研究院 教授 原島秀吉

12月7日（金）、薬学研究院S105室において、本分科会を開催しました。

本分科会は、ソウル大学薬学部のYu-Kyoung Oh教授の提案により、2010年の第13回ジョイントシンポジウムの際にスタートし、今回で3回目を迎えました。

両校の教員・学生を併せて40名以上が参加する大盛況の会となり、終日にわたって活発な討論が展開され、最終的には終了予定を約1時間延長しての閉会となりました。特に今回は、博士研究員や大学院生など若手研究者の参加が増えたこともあり、新しい試みとして若手研究者優秀発表賞を企画し、9名の博士研究員・大学院生が英語による口頭発表及び討論を互いに競い合う場を設けました。また、教員だけでなく大学院生・学部生を含む全ての聴衆による投票によって受賞者を選出するという総選挙方式での選考としたことで、聴衆として参加した学生も他者の発表を詳細に分析し、自身の研究成

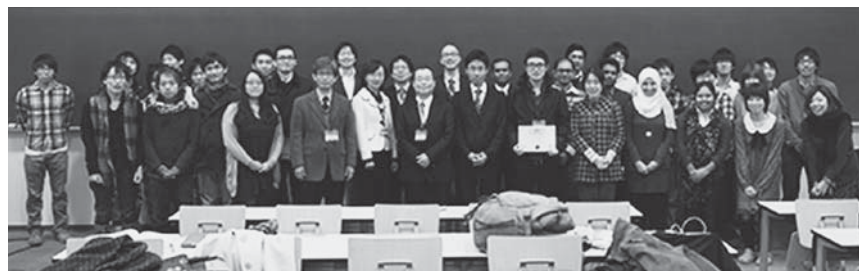
果やアイデアをわかりやすく聴衆に伝えるにはどのようにすれば良いかを積極的に学び取ろうとする姿勢が垣間見られました。閉会后、ソウル大学薬学部のOh教授及びYoungro Byun教授からもこの試みに対してご高評いただき、本分科会を成功裡に終えることができたと考えています。

今後もこのような国際的友好関係を継続的に発展させるとともに、両校の若手研究者・大学院生が互いに刺激し合うことで切磋琢磨する「協調と競争の関係」を構築できるよう努めたいと考えています。



優秀発表賞の記念写真

(左から、Byun教授、Oh教授、林 泰弘特任助教、Seung Woo Chung氏、原島秀吉教授、梶本和昭特任准教授)



分科会での集合写真

分科会9

Food Safety

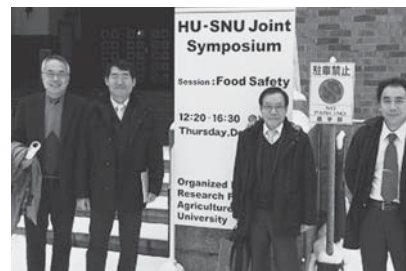
食の安全／農学研究院 教授 小林泰男

12月6日(木)、農学研究院W109室において、「食の安全」をテーマに本分科会を開催しました。ソウル大学からは農業生命科学部のJong K. HA教授を代表とする4名の教員が、本学側は農学研究院及び水産科学研究院の教員4名が、講演と司会進行を担当しました。本学から44名(うち教員9名)が聴衆として参加し、休憩をはさみ夕方まで活発な質疑応答がなされました。

この分科会では食の安全を、病原性発現などの分子レベルで扱う基礎科学、及び政治経済レベルから検討する社会科学の両面から取り上げ、幅広い聴衆を集め議論することを目標としました。今回は東日本大震災後の農作物や農地の放射能汚染(日本)、また口

蹄疫発生後の畜産業(韓国)など、私たちが直面する課題のほかに、抗生物質耐性遺伝子、食中毒菌の迅速検出、食中毒菌の病原性発現機構などを扱う講演を提供しました。質疑では本学の学生からも質問が出るなど、総じて議論は活発で、提供課題に理解が深まったのはもちろんのこと、両大学の研究者のネットワーク形成にも少なからず役立ったものと思います。

午前に実施したクローズドの会議では、次回の開催をソウル大学側から言明され、これまで実施してきた授業交換に代表される教育連携に加え、共同研究の発端ともなれる分科会に育ちつつあると感じました。



農学部看板前にて



講演中のソウル大学 Sangyeol Ryu教授

分科会10

Professional Development of Science Teachers in Asia: Focusing on Argumentation and ICT

アジアにおける理科教員のプロフェッショナル・デベロップメント：アーギュメンテーションとICTに着目して／教育学研究院 教授 大野栄三

12月17日(月)・18日(火)、教育学部大会議室で本分科会を開催し、本学から3名、ソウル大学から9名、他大学から3名の参加者がありました。ソウル大学と本学のほかに、東京学芸大学、台湾師範大学、ミシガン大学からも参加者が集まり、10件の研究発表と活発な議論が行われました。

17日(月)午後4時からのフォーラムでは、この1年間の共同研究の成果(韓国と日本での調査、7月の国際会議でのシンポジウム発表など)を総括し、現在の研究動向や研究課題についてブレインストーミングしました。翌18日(火)の分科会では、アーギュメンテーション(議論)とモデル化、授業研究、教師教育でのICT活用、根拠に基づくカリキュラム開発、博物館の利用、科学コミュニケーションについての発表があり、多くの知見を得るこ

とができました。

最後に、今後の共同研究について話し合う時間を設定し、来年度にソウル大学で開催されるジョイントシンポジウム分科会に向けて、いろいろな可能性を検討しました。



ソウル大学 Chan-Jong Kim教授(右)と本学教育学研究院 大野栄三教授(左)



昼食後に撮影した集合写真

分科会11

8th HU-SNU Symposium on Mechanical and Aerospace Engineering

第8回機械工学と航空工学に関するシンポジウム／工学研究院 教授 小林幸徳

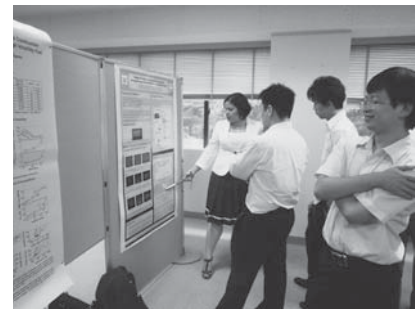


口頭発表の様子

本分科会は2005年にソウル大学航空宇宙工学科のW. I. Lee教授と本学工学研究院人間機械システムデザイン専攻の成田吉弘教授の企画によりスタートし、本年で8年目となります。年度当初より開催時期について協議し、今年度は気候のよい8月末、19日（日）～21日（火）に工学研究院アカデミックラウンジ及びA1-70室で開催するこ

としました。

今回は流体力学、燃焼工学、ロボット工学、振動工学、バイオメカニクスといった専門的テーマに加えて、基調講演として東日本大震災に関する話題なども紹介されました。夏の開催ということもあり、クールビズのリラックスした服装でのシンポジウムとし、フレンドリーな中にも活発な意見交換と



ポスターセッションの様子

なりました。

シンポジウムでは、本学 馬場直志工学研究院長の挨拶の後、ソウル大学から教員5名と学生5名、本学から教員11名と学生17名が研究発表を行いました。今回は学生セッションをポスターセッションとすることによって、本学大学院生から多数の参加がありました。学生は、ポスターセッションに先立ち、1人につき数分の口頭による研究概要説明も行いました。ポスターセッションは大変に盛況となり、学生間のみならず教員も含めて非常に良い交流の場となりました。

分科会12

The HU-SNU Joint Symposium on Materials Science and Engineering

材料科学に関する合同シンポジウム／工学研究院 准教授 橋本直幸

12月6日（木）・7日（金）の2日間、遠友学舎において、本分科会を開催しました。この分科会はソウル大学工科大学材料工学科と本学工学研究院材料科学専攻により、本年度から新しく企画された合同シンポジウムであり、Youngwoon Kim教授のご協力の下に行われました。

ソウル大学・本学双方から計15名の教授・准教授に本学の大学院生及び学部生を加えて、計40名程度の参加者数となり、12名の先生から材料科学に関する様々な分野の講演をいただきました。多岐にわたる発表内容でしたが、

それぞれが最先端で非常に興味深いものであり、専門の範囲を超えた有意義な討論ができたと思います。さらに、このような意見交換の場が自身の研究に役立つ大きなヒントを得る絶好の機会であることを、各参加者が再認識できたシンポジウムでもありました。

講演会の最後にはKim教授から閉会の辞をいただき、本シンポジウムの成功と意義について総括するとともに、次年度のソウル大学における第2回合同シンポジウムの開催を確認し、今後のさらなる緊密かつ強固な関係の構築が期待されるものとなりました。



講演の様子(ソウル大学 Ki Tae Nam准教授)

分科会13

Political Situation in Post-Soviet Countries

旧ソ連諸国の政治状況／スラブ研究センター長 宇山智彦

12月8日（土）午後1時から同4時45分まで、スラブ研究センター（SRC）とロシア・東欧・ユーラシア研究所（IREEES）との合同分科会をスラブ研究センター会議室で行いました。総合テーマは「旧ソ連諸国の政治状況」です。

はじめに両組織の代表である本学宇山智彦スラブ研究センター長とソウル大学 Kyung Hoon Leem社会科学カレッジ教授によるオープニングスピーチがあり、このような共同研究会の形で両組織の研究協力を継続することの深い意味が確認されました。

研究発表は2部構成で行いました。第1部ではソウル大学 Jaewon Chung 講師による「ネオリベラル・グローバルイゼーション時代の権威主義体制下のロシア市民社会」、及び本学スラブ研

究センター 松里公孝教授による「文脈化された暴力：ダゲスタンにおけるいわゆる対テロ戦争をめぐる政治」が発表され、それぞれの地域における政治状況と、その基底にある社会構造の現状が議論されました。第2部は国際関係に話題が絞られ、ソウル大学政治・国際関係学部の大学院生 Sarang Jeong氏による「プーチン大統領治下のロシアの対米政策：中央アジアにおける米軍駐留問題」、本学文学研究科大学院生のアセリ・ビタバローヴァ氏による「タジキスタンのロシア観：2000年代初期以降の両国関係をめぐる議論」の2報告が行われました。

当日はスラブ研究センター滞在外国人研究者や大学院生を含む23名（うち外国人6名）が参加し、活発な議論が交わされました。



分科会の様子



会場前での集合写真

分科会14

Development in curriculum policy and outcome evaluation

教育目標とアウトカム評価の発展／高等教育推進機構 教授 細川敏幸

12月7日（金）午前10時から、情報教育館4階の共用多目的教室（1）において、本分科会を開催しました。ソウル大学CTL（Center for Teaching & Learning）とのシンポジウムは今回で4回目になります。本学から7名、ソウル大学から4名の参加者がありました。

本学からは、①北海道大学と日本におけるカリキュラムポリシーの現状（高等教育推進機構 山岸みどり特任教授）と、②IRを利用したアウトカム評価（同機構 竹山幸作特任准教授）について報告しました。

ソウル大学からは、①ソウル大学での学生アンケート（2008-2011）の分析：工学部の場合（Hyeree Min准教

授）、②ソウル大学学部学生の学習過程と成果の分析：カリキュラム改革のために（Heewon Lee助教）、③ソウル大学での学習支援プログラムの改革（Eunmee Park研究員）、④ソウル大学における英語による授業の授業評価（2008-2011）の分析（Jinho Kim研究員）が報告されました。

韓国ではトップダウンで32大学が協力したIRシステム（共通アンケートによる学生調査）が2008年から実施されており、4大学で試験的に開始した日本の試みの先を進んでいることがわかりました。また、学部教育の1割を英語で実施しており、その授業評価が他の科目よりも高いことが示されています。

今回のシンポジウムのテーマでは、ソウル大学の教育改革が本学のそれを越えており、変化の遅い日本の大学教育改革が再確認されました。

来年も、さらに充実したシンポジウムを企画運営する予定です。



発表するソウル大学 Park博士

北大フロンティア基金

北大フロンティア基金は、本学の創基130年を機に、教育研究の一層の充実を図り、これまで以上に自主性・自立性を發揮して大学としての使命を果たすため、平成18年10月に創設しました。

募金目標額は50億円です。奨学金制度の充実や留学生への支援などの学生支援を中心に、研究支援、学部等支援など様々な事業を行っており、期限を付さない、息の長い募金活動することとしています。

皆様には基金の趣旨にご賛同いただき、ご協力をお願いします。

北大フロンティア基金情報	13,788件 2,545,908,672円
基金累計額 (12月31日現在)	教職員の寄附率 29.8% (1,154件/3,878人)

12月のご寄附状況

法人等7社、個人104名の方々から8,681,000円のご寄附を賜りました。

そのご厚志に対しまして感謝を申し上げますとともに、同意をいただいているの方々のご芳名、総合博物館への銘板の掲示、感謝状の贈呈について掲載させていただきます。(五十音別・敬称略)

寄附者ご芳名 (法人等)

いなほガンバ動物病院、株式会社札幌夜間動物病院、寺田医院、どうぶつ眼科VECS、中川動物病院、水本内科クリニック

寄附者ご芳名 (個人)

合川 正幸	阿部 啓之	天内 満雄	池田 清治	池田 元美	石川三千雄	石渡 英夫	伊藤 典彦
稲津 将	井野 智	上田 敦	上野 洋路	大関 邦夫	大谷 武彦	大谷 文章	小内 透
小沼 操	小原 大和	垣添 寛和	梶村 哲世	勝山 真吉	金川 眞行	鎌田 正信	川瀬 重雄
岸 昌生	岸本 佳則	小嶋 國利	駒庭 英夫	小柳 征夫	近藤 哲也	佐長 功	齋藤 和雄
齊藤 隆	佐藤 誠治	佐藤 時則	佐藤 文昭	三分一博基	渋谷 正人	鳥田 瑞穂	嶋津 克明
下村 仁司	白旗 修	鈴木 德行	須藤 修方	須藤 朋子	諏訪 恭一	瀬川 章	関崎 勉
瀬名波栄潤	鷹野 正義	高橋 廣雄	高橋 光彦	竹吉 悟	田中 教幸	田原 哲士	土屋 定之
土家 琢磨	寺澤 陸	寺嶋 淳	寺嶋 千草	照井めぐみ	豊田 威信	内藤 亨	中沢 洋
中野 嘉弘	中村 和司	西村 昇	布川 寧	野坂 政司	野田 仁央	野村 修一	橋本しおり
橋本 俊一	橋本 武志	長谷部文雄	春木 雅寛	福井 英一	藤田 正一	三寺 史夫	嶺野 幸子
武良 保晴	村上 明	森 尚久	森松 正美	矢島 正人	山崎 賢司	山崎 野枝	山下 匡
山田 敏彦	遊佐 稔	吉川 久幸	吉崎 正人	吉田 広志	吉田 正則	吉田 学	和田 直也
渡邊 悌二	渡邊 リラ						

銘板の掲示（20万円以上のご寄附）**（法人等）**

株式会社札幌夜間動物病院，寺田医院

（個人）

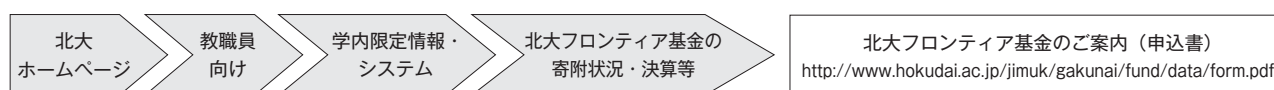
合川 正幸，伊藤 典彦，齋藤 和雄，諏訪 恭一，中野 嘉弘，武良 保晴

感謝状の贈呈

齋藤和雄様（平成24年12月20日）

ご寄附のお申し込み方法**① 給与からの引き落とし**

申込書は，本学ホームページの「学内限定情報・システム」からダウンロードし，ご記入の上基金事務室に提出してください。

**② 郵便局または銀行への振り込み**

基金事務室にご連絡ください。払込取扱票をお渡します。

③ 現金でのご寄附

寄附申込書に現金を添えて，事務局財務部経理課収入担当にご持参ください。申込書は，本学ホームページから上記①の要領でダウンロードしてご記入いただくか，各部局事務担当及び事務局財務部経理課収入担当にご用意していますので，ご利用ください。

北大フロンティア基金に関する問い合わせ 基金事務室（事務局・学内電話 2017）

（総務企画部広報課）

平成24年度第1回北大ペンハロー賞授与式を挙

12月6日(木)、高等教育推進機構中会議室において、平成24年度第1回北大ペンハロー賞の授与式を行い、山口佳三理事・副学長から各受賞団体に対して、賞状の授与と記念品が贈呈されました。

北大ペンハロー賞は、平成17年度から、北大えるむ賞に該当しない活動で、5団体以上が参加する都道府県規模の競技会・コンクール等で優勝する等、最も高い評価を受けた団体または個人を表彰する制度です。

今回は、5団体が受賞しました。本賞は今回までで、102団体、235個人の計337件に授与されています。

(学務部学生支援課)

受賞団体

弓道部、スケート部、軟式野球サークルLabbits、将棋部、医学部ボート部



授与式での記念写真

省エネパトロールの実施

12月18日(火)から26日(水)にかけて、サステナブルキャンパス推進本部長の三上 隆理事・副学長を筆頭に、サステナブルキャンパス推進本部と施設部が、今冬の節電対策の一環として、30部局の省エネパトロールを実施しました。

各部局では環境負荷低減推進員及び同補佐が同行し、共用スペースを中心に室温の測定、照明の明るさ、給湯器の温度設定などを点検しました。

今回の省エネパトロールでは、講義室・研究室の照明の消し忘れや空調の切り忘れ、トイレの便座の閉じ忘れや、給湯器の設定温度が高すぎる等の指摘

事項がありました。

その一方、好事例として、膝掛けを使用した暖房の抑制や、トイレや給湯室における電気ヒーターの停止等があり、また、ほとんどの部局が日中廊下の照明の間引き点灯や全消灯を行っており、省エネルギー活動が徹底されていることがわかりました。

今後も省エネパトロールによる啓発を実施する予定です。皆様には引き続き省エネルギー活動の推進にご協力をお願いします。

(サステナブルキャンパス推進本部)



室温をこまめに検証



測定器を使い室温測定

人材育成本部上級人材育成ステーションで「赤い糸会&緑の会」を開催

人材育成本部のS-cubicとHoP-Stationでは、11月30日（金）、学术交流会館において、「赤い糸会&緑の会」を開催しました。

本会は、企業と若手研究者（DC、PD）との直接情報交換会であり、企業には若手研究者の高い専門性や総合力を理解いただき、若手研究者には企業での研究開発活動や企業における博士の活躍状況等を知ってもらうことで、相互理解を深め、視野の複線化、活躍フィールドの拡大を図ることを目的としています。

今回で「赤い糸会&緑の会」は延べ19回目の開催となり、若手研究者の参加も回を重ねるにつれ増加し、理学院、薬学研究院、生命科学院、先端生命科学研究院、農学院、総合化学院、工学院、情報科学研究科、獣医学研究科、環境科学院等から31名（DC：29名、PD等：2名）の若手研究者が参加し

ました。また企業からも、医薬、食品、化粧品、化学、繊維、機械、バイオ、通信、電気、ベンチャー等の各種業界から15社（26名）に参加いただきました。

本会では、山口佳三理事・副学長の冒頭挨拶、川端和重先端生命科学研究院長による趣旨説明の後、参加企業の皆様から業界動向や博士の活躍状況等の紹介が行われ、その後、若手研究者の自己紹介ポスター発表、企業ブースを訪問しての個別情報交換等が活発に行われました。

さらにはこの「赤い糸会&緑の会」を通じて企業に就職した若手研究者の先輩方も企業説明会に参加し、後輩達に対して熱い思いを語ってくれました。

開催後のアンケートでも、「大変有意義な機会でした!」「様々な分野の情報交換ができ、認識を新たにしました!」「もっと時間を長くしてほしい!」「ぜひ次回も参加したい!」との声を数多くいただくことができました。

次回の「赤い糸会&緑の会」は、2月14日（木）に東京で開催予定であり、すでに参加枠の15社のエントリーがほぼ確定しています。

終わりに、人材育成本部では以上の活動に加えて、企業研究視察、Advanced-COSA、J-window、プレゼンセミナー、キャリアマネジメントセミナー、企業での長期インターンシップ等を通して、これまで以上に若手研究者の実践力を高めることへ注力して参りますので、今後ともご理解とご協力をよろしくお願い致します。

なお、興味のある方は人材育成本部のホームページをぜひご覧ください。
◆<http://www2.synfoster.hokudai.ac.jp>

（人材育成本部）



山口理事・副学長の挨拶



川端研究院長による趣旨説明



企業からの業界動向説明



会場の様子（業界動向説明）



若手研究者のポスター発表



企業との個別情報交換

■ 部局ニュース

医学研究科・医学部及び保健科学研究院・保健科学院が台湾 台北医学大学と部局間交流協定を締結

12月21日（金）、医学研究科・医学部及び保健科学研究院・保健科学院は、台湾の台北医学大学の4学部（医学部、看護学部、公衆衛生・栄養学部、医療技術学部）と部局間交流協定を締結しました。

台北医学大学で執り行われた調印式

には、台北医学大学からは医学部長であるChii-Ruey Tzeng教授ほか13名が出席し、本学からは玉木長良医学研究科長及び伊達広行保健科学研究院長ほか2名が出席しました。

玉木研究科長および伊達研究院長によるスピーチの後、各学部長が協定書

に署名し、記念品を交換しました。

この部局間交流協定に基づき、教員及び学生の交流が活発に行われることが期待されます。

（医学研究科・医学部、保健科学院・保健科学研究院）



各学部長の集合写真



記念品の交換（左：玉木研究科長）



記念品の交換（左：伊達研究院長）

保健科学院・保健科学研究院がインドネシア Diponegoro大学及びDr. Kariadi病院と部局間交流協定を締結

12月4日（火）、保健科学院・保健科学研究院は、インドネシア共和国中部ジャワ州の州都スマラン市において、Diponegoro（ディポネゴロ）大学医学部及び大学附属Dr. Kariadi（カリアディ）病院と部局間交流協定を締結しました。

スマラン市は古都ジョグジャカルタで知られる中部ジャワ州の州都です。人口は150万人を超え、ジャカルタ、スラバヤ、メダン、バンドンと並ぶ5大都市と称されます。

Diponegoro大学は1957年創立の11学部を擁する総合大学です。イギリスの高等教育情報機関（Quacquarelli Symonds：QS）による世界大学ランキングではインドネシアで第8位です（2012年）。医学部は医学科、看護学科、栄養学科を擁しています。また、独立

した公衆衛生学部もあります。

一方、Dr. Kariadi病院はオランダ領であった1925年に創立され（1942年から1945年の日本統治時代は「中央市民病院」と改称）、独立を経て1964年に現在の名称となりました。大学の附属病院ですが独立した研究教育機関であり、放射線、リハビリテーション、検査なども充実した基幹総合病院です。

近年、経済発展がめざましく、日本とのつながりも深いASEAN諸国の研究機関と協定を結んだことは、長期的視点において意義が大きいと考えます。今後、密接な交流を通じて、研究・教育の両面において双方に有益なパートナーシップを構築していきたいと思えます。

（保健科学院・保健科学研究院・医学部保健学科）



調印式で署名する
伊達広行保健科学研究院長（右から2人目）



調印式での記念写真

保健科学院が独立行政法人放射線医学総合研究所と 大学院連携協定を締結

12月1日（土）、保健科学院は独立行政法人放射線医学総合研究所と大学院連携協定を締結しました。この連携協定は、教育活動、研究活動、社会貢献活動など、相互協力が可能な各分野において、双方が互恵の精神に基づき連携及び研究教育協力を推進し、その成果を促進することにより、我が国の放射線科学の発展・継承に寄与することを目的としています。

また、本協定締結に伴い、保健科学院で最初の連携分野となる「重粒子医科学分野」が本年4月1日付で設置されます。この連携分野の特徴は、保健科学研究院と最先端の放射線科学研究を行っている放射線医学総合研究所との共同研究・研究交流が推進されるだけでなく、人材育成の推進の一環として、本学保健科学院博士後期課程の大学院生が放射線医学総合研究所で研究指導を受けることが可能となります。

今回、協定を結んだ放射線医学総合

研究所は、昭和32（1957）年に創設された放射線と人々の健康に関する研究開発に取り組む国内唯一の研究機関と言っても過言ではありません。千葉市稲毛区にある同研究所は、重粒子医科学センター、分子イメージング研究センター、放射線防護研究センター、緊急被ばく医療研究センター等で構成されています。今回の連携の核となる重粒子医科学センターは、国内で唯一の放射線治療専門病院であり、国内第1位の重粒子線治療の実績を誇る重粒子医科学センター病院を中心に、融合治療診断研究プログラム、次世代重粒子治療研究プログラム、先端粒子線生物研究プログラム、国際重粒子医科学研究プログラムを有しています。平成22年には国際原子力機関（IAEA）の協働センターに認定されるなど、国際的にも評価の高い研究機関です。

連携分野の客員教員としては、放射線医学総合研究所重粒子医科学セン

ター病院長の安藤 裕先生、重粒子線医科学センター融合治療診断研究プログラムリーダーの辻比呂志先生が着任されます。両先生は、放射線治療専門医としての豊富な臨床経験と研究実績をお持ちであり、保健科学院博士後期課程・保健科学コースにおける先進医療科学科目群の主任指導教員・副指導教員として、博士後期課程の大学院生を研究指導していただきます。また、授業科目として「重粒子医科学特講」を放射線医学総合研究所にて開講していただく予定です。

放射線医学総合研究所での様々な共同研究、連携分野「重粒子医科学分野」での研究指導を通じた博士号取得を希望される方は、ぜひご連絡ください。よろしく申し上げます。

（保健科学院・保健科学研究院・医学部保健学科）

研究指導のテーマ

安藤客員教授：医療情報の標準化に関する研究

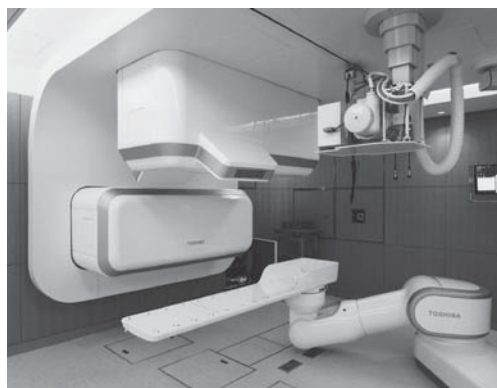
臓器Registrationの画像処理及び放射線治療分布等に関する研究

辻客員教授：粒子線治療の臨床効果に関する研究

放射線治療における先進技術に関する研究



放射線医学総合研究所



重粒子線がん治療装置

歯学研究科がデンマーク オーフス大学歯学部と部局間交流協定を締結

歯学研究科とデンマーク・オーフス大学歯学部は、海外教育交流支援事業の援助を受けて、歯学研究科の教員及び大学院生とオーフス大学の研究者との共同研究、オーフス大学の世界的に著名な研究者が来学しての講義、セミナーやシンポジウムを行うなどの交流を重ねてきました。これらの実績を踏まえて部局間交流協定を締結することとなり、11月12日（月）に、鈴木邦明歯学研究科長と交流に直接関わってきた有馬太郎助教の2名がオーフス大学を訪問し、調印式が行われました。

オーフス大学は大きくARTS, SCIENCE AND TECHNOLOGY,

HEALTH, BUSINESS AND SOCIAL SCIENCESの4部門からなり、歯学部は医学部、薬学部などとともにHEALTH部門に属しています。協定書の署名は、オーフス大学HEALTHの部門長であるAllan Flyvbjerg教授及び歯学部長であるEllen Frandsen Lau教授と、本学の鈴木歯学研究科長とで行いました。

デンマークを含む北欧諸国は歯学教育・研究のレベルが高く、今後も積極的に教員・学生の相互訪問、共同研究、情報交換を行っていく予定です。

(歯学研究科・歯学部)



協定書に調印する鈴木研究科長とFlyvbjerg部門長（右）、Lau学部長（左）

地球環境科学研究院が「北国の省エネ・新エネ大賞」を受賞

地球環境科学研究院が、北海道経済産業局が実施している平成24年度「北国の省エネ・新エネ大賞（エネルギー開発・利用・普及優良事業者等北海道経済産業局長表彰）」の「有効利用部門」を受賞し、12月21日（金）に札幌市内のホテルで授賞式が行われました。

同賞は、「エネルギー開発・利用・普及優良事業者等北海道経済産業局長表彰実施要領」に基づき、北海道においてエネルギーに関する開発、有効利用及び普及に関し、著しい成果や功績があり、他の模範となる組織・個人を表彰することによって、省エネルギー

の推進、新エネルギーの導入を加速させることを目的として実施されているものです。

受賞の対象となったのは、沖野龍文准教授（地球環境科学研究院統合環境科学部門）と渡邊武志君（環境科学院博士後期課程）が中心となって実施している“環境科学院「見える化」システムを活用する環境負荷低減実現プロジェクト”での取り組みであり、その成果が認められ今回の受賞となりました。

本プロジェクトは、“理系大学院における「見える化」システムを活用した設備運用改善と構成員コミュニケー

ションによる省エネ実現”というテーマで推進され、その結果、平成24年度上半期は、平成22年度比でガス38%減・電気15%減の省エネを達成しています。

今後、これらの方策を本研究院外でも活用できるよう情報発信を行うとともに、環境教育の場における環境意識の向上と省エネ実践を行っていく予定です。

(環境科学院・地球環境科学研究院)



北海道経済産業局長から表彰状を授与される嶋津克明地球環境科学研究院院長



表彰状と記念品を手に（左から沖野准教授、嶋津研究院長）

文学研究科人間システム科学専攻が 「卓越した大学院拠点形成支援」に採択

この度、文学研究科人間システム科学専攻が、文部科学省「卓越した大学院拠点形成支援補助金」事業（以下、卓越拠点）に採択されました。卓越拠点は、優秀な学生をひきつけ、世界で活躍できる研究者を輩出する環境づくりを推進することを目的として、優れた研究基盤を活かし高度な教育と研究を融合する卓越した拠点を有する大学に対し、博士課程の学生が学修研究に専念する環境を整備するために必要な経費を支援するものです。本学では総額385,437千円が交付され、本専攻は採択に際して最も高い評価であるSのグループに位置づけられました。

人間システム科学専攻は、21世紀COE「心の文化・生態学的基盤に関する研究拠点」（平成14～18年度：山岸俊男リーダー）、グローバルCOE「心の社会性に関する教育研究拠点」（平成19～23年度：亀田達也リーダー）における中核専攻として、本学の人文

社会系における先端的な研究・教育に貢献してきました。また、本専攻は、「魅力ある大学院教育」イニシアティブ「人間の統合的理解のための教育的拠点」（平成17～18年度：仲真紀子代表）、大学院教育改革支援プログラム「人文科学における実証的研究者の育成拠点」（平成19～21年度：仲真紀子代表）、組織的な若手研究者等派遣プログラム（平成22～24年度：櫻井義秀代表）を実施し、COEプログラムと有機的に組み合わせる形で、高度の大学院教育を行ってきました。

こうした研究・教育活動を支えるインフラとして、「社会科学実験研究センター」が創成研究機構のもとに設置されており、若手研究者に対して、ワークショップ、サマープログラム、国際学会への参加支援を行うとともに、教育研究業績の一元管理、キャリアサポートなどの多様なサービスを提供しています。

卓越拠点はグローバルCOEの後継事業に位置づけられると考えられており、平成25年度以降もさらなる展開が期待されています。

◆卓越した大学院拠点形成支援補助金
「心の社会・生態学的基盤に関する教育研究拠点」

<http://lynx.let.hokudai.ac.jp/SEFM/>

（文学研究科・文学部）



社会科学実験研究センター

メディア・コミュニケーション研究院公開講座 「世界のリーダー交わりを考える」が終了

メディア・コミュニケーション研究院では、平成24年度公開講座「世界のリーダー交わりを考える」を、11月29日から12月20日まで毎週木曜日、全4回にわたり実施しました。

本講座では、大統領選挙や党大会による権力交代をひとつの大きなテーマとして、アメリカ、中国、アフリカ、そして韓国をそれぞれ取り上げました。オバマ政権成立後のアメリカの政治文脈と2012年大統領選、中国共産党第18回大会と中国情勢の行方、アフリカにおける憲法改正後の大統領選挙、韓国の民主主義において歴史的な分水嶺となる大統領選を、本学院の各専門分野の教員が担当して読み解きました。

講義中に積極的にメモをとったり、講義終了後に熱心に講師に質問したり

する受講生の姿がたくさん見られ、グローバル化を背景に日本のことだけでなく、より広い視野で深く世界を認識する受講生の意欲が見えました。

講座の最終日には、3回以上出席した63名の受講生に修了証書が授与さ

れ、本講座は盛況のうちに幕を閉じました。

（国際広報メディア・観光学院、
メディア・コミュニケーション研究院）



講義風景

農学研究院で平成24年度第3回FD研修会を開催

12月10日（月）・11日（火）午後4時30分から同6時まで、農学院大講堂及びS12講義室において、平成24年度第3回FD（ファカルティ・ディベロップメント）企画「授業英語化の推進」を開催しました。初日は講演会で78名が聴衆として参加し、そのうち希望した12名が2日目のワークショップ（マイクロティーチング）に参加しました。

今回は、香港工科大学教育改革センターのJohn Sager氏から、英語授業の基本姿勢や具体的な取り組みについて、韓国・高麗大学校でのプログラムに沿って説明や問いかけがなされました。また、講演の後には質疑の時間を設けました。

2日目のマイクロティーチング研修では、6名の希望教員が各々4分の英語授業を実施し、その後、その他の教員が「良かった点」について具体的に

指摘し合い、Sager氏からもコメントが出される方式で進めました。各授業はビデオカメラで撮影して映像を本人に配布し、後日に改めてビデオに映った自分を客観視できるようにしました。

このマイクロティーチングを通して、研修者は多いに刺激を受けるとともに、今後の授業改善に具体的な示唆が得られたようでした。マイクロティーチングは複数回の研修を受けるとより効果的と言われていますので、定期的

な実施が必要と感じました。

なお、本FDは高等教育推進機構の細川敏幸先生、山岸みどり先生のご支援の下、企画実施されました。参加者全員に「英語による授業サポートマニュアル」を配布しましたが、これは同機構から提供されたものです。ここに記して感謝いたします。

（農学院・農学研究院・農学部）



Sager氏の講演に聞き入る受講者



ワークショップの様子

低温科学研究所技術部で第18回技術報告会を開催



技術報告会の様子

12月14日（金）、低温科学研究所講義室において、低温科学研究所技術部主催・教育研究支援本部共催による第18回技術報告会を開催しました。

報告会では、9件の低温研技術部が関わった研究発表や技術報告が行われました。例年同様、専門領域を超えて多様な分野の研究に触れる貴重な場となり、延べ30名以上の所内外の研究者・学生・技術職員が参加し、活発な

意見が交わされました。

なお、本報告会の内容をまとめた「北海道大学低温科学研究所技術部技術報告第18号」を発行しました。詳しい内容は本研究所技術部ウェブサイトからも閲覧できます。

◆<http://www.lowtem.hokudai.ac.jp/tech/>

（低温科学研究所）



渡部直樹技術部長の挨拶



技術職員による発表

「法科大学院に関するアドバイザリーグループ会議」を開催

11月30日（金）、東京都千代田区の学士会館において、「第11回法科大学院に関するアドバイザリーグループ会議」を開催しました。

本会議は、法曹界、産業界、教育界等各界において現在中核を成して活躍されている法学部卒業生の方で構成されており、毎年、法科大学院のみならず、法学研究科全体及び法学部に対して助言をいただいています。

第11回となる今回は、元横浜地検検事正の五十嵐紀男氏をはじめ11名のメンバー、そして法学研究科からは松久三四彦法学研究科長及び池田清治法科大学院長が出席しました。

会議では、最初に本学及び法学研究科・法学部の近況が報告され、続いて、法科大学院の今後の在り方等について熱の入った活発でかつ貴重な意見交換及び提言がなされ、盛会のうちに終了しました。

（法学研究科・法学部）



松久法学研究科長（左奥）から法学研究科及び法学部の現状報告

附属図書館で「AED講習会」を開催

附属図書館では、12月14日（金）、19日（水）の2日間、札幌市北消防署幌北出張所の所員3名を講師に迎え、本館4階大会議室において図書館職員を対象にしたAED講習会を開催しました。

14日（金）は21名、19日（水）は18

名、合計39名の参加があり、講師よりAED（自動体外式除細動器）の使用方法的説明の後、人体モデルを使って倒れている人への心臓マッサージや人工呼吸の心肺蘇生法、AED使用の実践訓練を行いました。

附属図書館は本館2階総合カウン

ター前と北図書館2階カウンター前にAEDを設置し、札幌市が実施している「さっぽろ救急サポーター事業」にも参画しています。

（附属図書館）



AED講習会の様子



実践訓練の様子

平成24年度 北海道大学薬学部合同企業セミナーを開催

薬学部では、12月5日（水）・6日（木）、18日（火）、20日（木）の4日間、臨床薬学講義室等において、平成24年度北海道大学薬学部合同企業セミナーを開催しました。

このセミナーは、薬学部及び生命科学学院・生命科学専攻生命医薬科学コースの学生の多くが製薬関連企業への就職を希望していることから、そのニーズに応えるため、製薬関連企業に参加を依頼し、平成25年度卒業・修了予定者を主な対象として毎年独自に開催しているものです。

今年度は4日間で延べ28社が参加し、パワーポイント等を用いて企業情報を紹介する全体説明に続き、ブース

による個別説明が行われ、多数の学生が参加しました。

参加した学生はスーツ姿に緊張した面持ちながらも、熱心に耳を傾け、質問を行ったり、メモを取ったりするなど積極的に参加し、企業の方のご尽力

もあって無事終了することができました。

この説明会が、学生の就職活動の一助となることを期待しています。

（薬学研究院・薬学部）



全体説明にて耳を傾ける学生



ブースでの個別説明の様子

「平成24年度北海道大学工学系産業技術フォーラム」を開催

12月15日（土）・16日（日）の2日間にわたり、工学院・工学部主催で「平成24年度北海道大学工学系産業技術フォーラム」を開催しました。

本フォーラムは、工学系の学生を対象としたキャリア支援の一環として、様々な産業分野における業務内容、求められる技術や専門性、並びに技術者や研究者などの仕事内容について、産業界で活躍する方々の話を聞き、学生が業界やそこで働く技術者・研究者への理解を深め、進路を見据え勉学意識を高めること及び主体的に企業・業界研究を進めるようになることを目的としています。

今年度は、2日間で計107社の企業が参加し、参加企業の業種は化学、電気、機械、自動車、情報・通信、建築など多岐にわたりました。

当日は、参加企業による企業講演会及び交流会が行われました。企業講演会は、1グループあたり3～4社のグループ講演形式で行われ、各参加企業からそれぞれ自社の事業紹介や仕事内容等について講演していただきまし

た。企業講演会終了後には、各参加企業の技術者・採用担当者と学生による交流会が行われました。

講演会には2日間で延べ1,079名の学生が参加し、熱心にメモを取りながら企業の情報収集を行い、その後の交流会では、各企業の担当者に活発に質問する学生の姿が多数見られました。

（工学院・工学研究院・工学部）



企業講演会で熱心に情報収集する参加学生



和やかな雰囲気の交流会

函館キャンパス体育館で 「水産学部・水産科学院主催企業セミナー」を開催



企業ブースを訪問する学生

12月8日(土)・9日(日)、平成26年3月卒業・修了予定者の就職希望者を主な対象とした企業セミナーを、水産学部・水産科学院主催により、函館キャンパス体育館を会場に開催しました。本セミナーは、キャリア支援の一環としてブース形式で企業の採用担当者との面談を行う機会を設け、面接など本格的な選考過程に入る前に企業等への理解を一層広げ深めてもらうことを目的としたもので、北海道教育大学函館校や公立はこだて未来大学をはじめとする函館市内の他大学生にも開放されました。

当日は、セミナー本番前の午前9時から、1回30分の講演を各日それぞれ異なるテーマで2回ずつ実施し、初日の講師には、本学キャリアセンターキャリアアドバイザーの小澤祐介氏、及び株式会社マイナビ キャリアサポーターの曳田英里奈氏を、また2日目の講師には、株式会社ジェイ・ブロード 北海道支社長の前田健郎氏、及び株式会社学情 学校企画部長の東修三氏をお招きし、それぞれ「北大生

の就職事情と戦略」「本番前に確認！企業研究と実践マナーの落とし穴」「エントリーシート対策」「面接対策～ココがポイント」と題して講演が行われました。参加した学生は緊張した面持ちでしたが、企業ブースを訪問するにあたってのマナーや採用選考における対策等についてメモを取りながら熱心に聴講していました。

その後、午前10時から企業セミナーが始まり、当日は、マルハニチロホールディングス、日本食研ホールディングス、よつ葉乳業をはじめとする食品製造及び水産系の人気企業に加え、大塚製薬、大正製薬などの大手製薬会社や、その他IT、流通、小売など幅広い業界から合計71社が参加して企業ブースが設けられました。さらに、講演講師による就職相談コーナーも設けられ、就職活動全般やエントリーシートの相談等を希望する学生の対応にあたっていました。

このセミナーは1回40分サイクルで1日7回までのスケジュールが組まれており、各ブースを訪問した学生は、



セミナー本番前の講演を熱心に聴講する学生



本学の就職事情について丁寧に説明する小澤キャリアアドバイザー

これまでの企業研究を活かしながら集中力を持続させ、真剣な眼差しで採用担当者の生の声に耳を傾けていました。また、積極的に採用担当者へ質問をする場面も見られ、非常に熱心な様子が見られました。中には最終回の第7回まで企業ブースを訪問した学生や、限られた時間を上手く利用して相談ブースを訪問する学生もおり、参加者はそれぞれの歩き方で本セミナーに参加していました。本学からは2日間で延べ230名の学生が、また他大学からも83名の学生が参加し、盛況のうちに終えることができました。

今後もキャリア支援の一環として、この取組みをより一層充実させた形で継続していく予定です。

(水産科学院・水産科学研究院・水産学部)

ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～ KAKENHI「ようこそ不思議な細菌の世界へ！～身の周りの細菌を見てふやして感じてみよう～」を開催



グループに分かれた実習の様子

保健科学研究院では、12月9日(日)、高校生を対象とした日本学術振興会主催の実体験プログラム「ようこそ不思議な細菌の世界へ！～身の周りの細菌を見てふやして感じてみよう～」(実施代表者：教授 山口博之)を開催しました。

科学に興味を持ちその研究領域に足を踏み入れる学生数が極めて少なくなってきました。これは科学の将来にとって由々しき事態であり、抜本的な解決策を速急に見いださねばなりません。そこで、細菌学を通して科学への興味を次の世代を担う若者にぜひ持ってもらいたいという強い願いから、本研究院ではこのプログラムを継続的に実施しており、今回で5回目の開催となりました。

当日のプログラムには高校生18名、保護者・引率者など8名の計26名の参加があり、大変賑やかな実習となりました。プログラムは参加者の掌や口の中に常在する細菌を培養しグラム染色を通して見てみるという極めて単純なものです。その一方で、参加者の口の中や掌の細菌を見るためには少なくとも1日以上以上の培養時間が必要であり、プログラムにおさめるための工夫が必要です。そこで、細菌培養用の平板培地と掌型培地を参加者に送りサンプリ

ングしてもらったものを送り返してもらい、実施日には参加者自身が培地上に自分の体から培養された細菌を実際に観察できるようにしました。また、参加者の疑問点や質問に対して誠意を持って対応できるように参加者3～4名ごとに大学院生や学部生のTAを1名配置したことで、TAを通して実験内容を細部にわたりフォローするとともに、研究室での具体的な研究活動等の話題を通して双方向型のやり取りが可能になりリラックスした環境を作り、参加者と実施者との円滑なコミュニケーションを実現しました。そして、今年のプログラムは午前中から開始し、昼食も参加者と実施者が一緒にとり、参加者と実施者間での会話がより弾むよう工夫しました。さらに、参加者自ら撮影した顕微鏡イメージをUSBに保存し、プレゼントしました。

菌を直接顕微鏡で眺めて驚く参加者の姿を見て嬉しく思うとともに、さらに感動を与えられるプログラムに進化させるための強い意欲が湧いてきたのも事実です。またOHPを用いて体験した内容について参加者に発表してもらい、当日の感動体験を心に刻んでもらいました。最後に、高校生の参加者に伊達広行保健科学研究院長より「未来博士号」が授与され、プログラムを無



手指細菌集落を実際に観察する様子



発表会の様子



伊達研究院長より参加者へのメッセージ(授与式)

事終了しました。

東京など大都市とは異なり、地方都市でこのようなプログラムへの大勢の高校生の動員は困難を極めます。そこで本学周辺の高校の先生と連携を図るようになり、本年度は一層それを強化しました。その甲斐あって参加者数は定員20名をコンスタントに維持しています。今後は、高校への出前講演などもプログラムに加え、高校生の積極的な参加をさらに促進したいと思っています。様々な科学ジャンルが交差する保健科学だからこそ可能なオリジナリティーの高い、若い世代の知的好奇心を存分に惹起しうる魅力的な科学融合プログラムを継続して実施していきます。

(保健科学院・保健科学研究院・医学部保健学科)

北海道大学病院でクリスマスコンサートを開催



札幌・ジュニア・ジャズスクールの演奏



寶金副病院長による開会の挨拶



川畑看護部長による閉会の挨拶

北海道大学病院では、12月19日(水)、第48回ふれあいコンサート「クリスマスの夕べ」を開催しました。毎年恒例になっているこのコンサートですが、今年も会場のアメニティホールには、色とりどりの電飾が施された高さ3mの特大クリスマスツリーが飾られ、見慣れた風景が華やかに彩られました。

寶金清博副病院長の開会の挨拶で開幕し、札幌・ジュニア・ジャズスクールによる演奏が行われました。札幌・ジュニア・ジャズスクールは、小中学生から成るジャズスクールで、道内各所で行われる音楽イベントに出演しています。今回は小学生クラスによるビッグバンド編成の「SJF JUNIOR JAZZ ORCHESTRA」が来院しました。「ジングルベル」「赤鼻のトナカイ」など定番のクリスマスナンバーに患者さんの手拍子が加わり、会場全体がジャズの空気で満たされました。

また、演奏の合間には、サンタクロースに扮した職員から子ども達へのプレゼントが配られ、会場からは喜びの声が上がっていました。

コンサートは川畑いづみ看護部長の挨拶で幕が下りました。職員らによる

手作りのクリスマスコンサートは、訪れた人々の心に暖かな思い出を残したことでしょう。

(北海道大学病院)



クリスマスの装いの子ども達

博士学位記授与

12月25日(火)に本学大学院研究科等の所定の課程を修了した課程博士は26人、及び本学に学位論文を提出してその審査、試験等に合格した論文博士は9人でした。

なお、被授与者の氏名と論文題目等は次のとおりです。

(学務部教務課)

課程博士

博士の専攻分野の名称	博士の学位を授与された者		博士論文名
	氏名		
博士(文学)	こおり 郡田 尚子		Edward Bulloughの美学 ―歴史的・思想的背景とその展開― 主査：教授 北村清彦
	ダーライボヤン DALAIBUYAN ビヤムバジャフ BYAMBAJAV		Post-Socialist Transition and Civil Society in Mongolia (モンゴルにおける社会主義体制崩壊後の移行と市民社会に関する研究) 主査：教授 櫻井義秀
博士(医学)	いの 猪又 崇志		喫煙誘導肺気腫の病態におけるカタラーゼの役割に関する研究 主査：教授 秋田弘俊
	さくしま 佐久嶋 けん研		神経サルコイドーシスにおける脊髄病変の臨床的特徴と診断方法に関する研究 主査：教授 久住一郎
	たけ 竹崎 俊一郎	しゅんいちろう	機能獲得型の <i>de novo</i> 新奇変異を <i>STAT1</i> のDNA-binding domainに認めた慢性皮膚粘膜カンジダ症の病態解析 主査：教授 笠原正典
	たに 谷口 菜津子	ぐち なつこ	気管支喘息・COPDの発症および病型に関する遺伝的背景の検討 主査：教授 有川二郎
博士(獣医学)	むら 村上 正 ひろ 正 紘		Evaluation in tumor microenvironment after multi-kinase inhibitor sorafenib in human renal cell carcinoma xenograft by positron emission tomography probes (陽電子放射断層撮影用放射性トレーサーによるヒト腎細胞癌移植モデルにおけるマルチキナーゼ阻害剤sorafenib治療後の腫瘍微小環境の評価) 主査：教授 滝口満喜
博士(環境科学)	みず 水木 千 ちはる 千 春		2011年東北地方太平洋沖津波災害に依拠した北海道太平洋沿岸における津波危険度に関する総合的研究 主査：教授 渡邊悌二
	さい 斎藤 達也	たつ や	The effects of biological invasion of <i>Solidago gigantea</i> Aiton on native grasslands (在来草地に対するオオアワダチソウによる生物学的侵入の効果) 主査：教授 露崎史朗
	アンドレア ANDREA ロクサン ROXANNE ジョクシング アナス JOCISING ANAS		Studies on linear peptides from the freshwater cyanobacteria of genus <i>Anabaena</i> (淡水産ラン藻 <i>Anabaena</i> 属の直鎖ペプチドに関する研究) 主査：准教授 沖野龍文
博士(理学)	アハマド シャウキイ Ahmed Shawky モハマド Mohammed ガリーブ Ghareeb		Studies on Room-Temperature Synthesis of Nanocarbon Materials via Electrochemical Process (電気化学プロセスによるナノカーボン材料の室温合成に関する研究) 主査：教授 村越 敬
	ジュディ フェ Judy Fe フェルナンデス ホセ Fernandez Jose		Design, Structure, and Physical Properties of Molecular Solids Based on Porphyrin Complexes (ポルフィリンに基づく分子性固体の設計及び構造、物性研究) 主査：教授 稲辺 保
	はやし 林 剛 瑠		立体構造に基づいたヘリコバクター・ピロリがんタンパク質 CagA の機能制御機構に関する研究 主査：教授 坂口和靖
	もて 茂木 俊 憲		Studies on Structures and Dynamics of Lipid Bilayers at Single Molecule Level (単分子領域における脂質二分子膜構造と動力学に関する研究) 主査：教授 村越 敬
	スルビキルティ Surbhi Kirti ミシュラ Mishra		Role of SDF-1 signaling during gastrulation in <i>Xenopus laevis</i> (アフリカツメガエル原腸胚期におけるSDF-1情報伝達の役割) 主査：准教授 福井彰雅
博士(農学)	よし 吉本 さとし 論		フードシステムの産業連関構造に関する経済分析 ―北海道食産業の付加価値創造の構図― 主査：准教授 近藤 巧

博士（農学）	リュウ 劉 ルイ 瑞 芳	Genomic study on integrations of endogenous rice tungro bacilliform virus-like sequences and episomal DNAs in the rice genomes (イネゲノムに内在するウイルス様配列とエピゾームDNAの挿入に関するゲノミクス研究) 主査：教授 貴島祐治
博士（生命科学）	き 喜 多 俊 介 しゅん 俊 介	Crystal structure analysis of putative rRNA methyltransferases from <i>Staphylococcus aureus</i> (黄色ブドウ球菌由来rRNAメチル基転移酵素の結晶構造解析) 主査：特任教授 田中 勲
	かつ 勝 島 啓 佑 しま 啓 佑	Study of epigenetic regulation of histone modifications and non-coding RNAs involved in glioma stem cell differentiation (脳腫瘍幹細胞の分化に関わる非翻訳RNAおよびヒストン修飾によるエピジェネティクス制御機構に関する研究) 主査：准教授 瀧谷重治
博士（教育学）	しん 新 藤 こそえ どう 藤 こそえ	青年期・成人期における知的障害者の自立観 ―ライフコース視点からの分析― 主査：教授 松本伊智朗
	つち 土 田 幸 男 だ 田 幸 男	中央実行系におけるワーキングメモリ容量と抑制機能に関する心理生理学的研究 主査：教授 室橋春光
博士（工学）	み と べ 三 戸 部 佑 太 う 部 佑 太	3次元動的自由水面形状計測技術の開発 主査：准教授 渡部靖憲
	き さ 笹 本 ひろし 広 もと 本 ひろし 広	Effects on Chemical Parameters of Deep Groundwaters to Evaluate the Undisturbed Hydrochemical Conditions (未擾乱の水理化学条件の評価における深部地下水の化学パラメータへの影響) 主査：教授 佐藤 努
	サリナス ヴィラファネ Salinas Villafane オマル ロベルト Omar Roberto	Effects of surface soil layer systems to remediate weathered rocks at a former mine site (鉱山跡地における風化岩石の環境修復のための表層土壌層設置の影響) 主査：教授 五十嵐敏文
	バク 朴 ジュ 幸 弘 ジュ 幸 弘	仕上塗材の劣化を考慮した鉄筋コンクリート造部材の中性化進行および塩化物イオン浸透予測に関する解析的研究 主査：准教授 長谷川拓哉
	お 小 田 治 恵 だ 田 治 恵	TRU廃棄物地層処分における緩衝材の変質評価に関する研究 主査：教授 佐藤 努

論文博士

博士の専攻分野の名称	博士の学位を授与された者	博 士 論 文 名
	氏 名	
博士（学術）	さ 左 近 幸 村 こん 近 幸 村	海域ロシアの形成：近代ロシアの海運と帝国の統合 主査：教授 松里公孝
博士（環境科学）	マリカル MARICAR モラレス アグイロス MORALES AGUILOS	Long-term evaluation on the effect of anthropogenic disturbances to the carbon budget of cool-temperate mixed forests in northern Hokkaido, Japan (人為起源の攪乱が北海道北部冷温帯混交林の炭素循環に及ぼす影響に関する長期評価) 主査：准教授 高木健太郎
	とみ 富 田 おきむ 修 た 田 おきむ 修	酸化タングステン系光触媒を用いた高選択的有機合成反応の開発 主査：教授 大谷文章
博士（農学）	うえ の 野 ひろし 宏 の 野 ひろし 宏	鉄・ラクトフェリンの加工特性に関する研究 主査：教授 松井博和
	ウン 翁 ハク 伯 琦 ハク 伯 琦	Study on Mulching Function to Orchard Land in Subtropical Red and Yellow Soils of China (中国の亜熱帯赤黄色土壌地域における果樹園でのマルチ機能に関する研究) 主査：教授 大崎 満
	さい 齊 藤 み 美 樹 とう 藤 み 美 樹	捕食性土着天敵ヤドリダニ類を用いた作物加害性コナダニ類の生物的防除に関する研究 主査：特任教授 齋藤 裕
博士（生命科学）	ふじ 藤 井 やす 健 行 い 井 やす 健 行	Studies on the immunosuppressive and anti-angiogenic effects of novel selective S1P ₁ antagonists (選択的 S1P ₁ 拮抗薬の免疫抑制作用及び血管新生抑制作用に関する研究) 主査：教授 門出健次
博士（工学）	ジンワン ジャン Jinhwan Jang	A New Scheme for Prompt Detector Evaluations Based on Traceability and Confidence Interval Concepts (遡及性と信頼区間の概念に基づく迅速な車両検知器評価のための新しい手法) 主査：教授 中辻 隆
	まつ 松 林 たく 卓 ばやし 林 たく 卓	繰返し衝撃荷重が作用する防波堤ケーソン壁の耐荷性能評価方法に関する研究 主査：教授 横田 弘

■レクリエーション

方円会が北大囲碁部との交流会を実施

— 全日本学生囲碁選手権大会に向けて「檄を飛ばす会」 —



和やかに交流碁を楽しむ学生・教職員

12月8日（土）の午後、本学方円会（教職員囲碁同好会）が高等教育推進機構に北大囲碁部（学生）を招いて、恒例の「交流会（壮行会）」を実施しました。

昨年度学生アマ全国トップの学生本因坊を獲得した九段格（小山光晶君：経済学部3年・本学エルム賞受賞）から初級者（7級程度）まで、学生15名・教職員10名が参加し、1人当たり2～3局の交流碁を楽しみました。

交流会は、方円会前会長の南部 昇名誉教授（文学研究科）の激励の挨拶で始まり、参加者全員の自己紹介の後、交流碁が終始和やかな雰囲気で行われ

められました。

平成3年度全日本学生名人位獲得と平成5・7年度全日本学生団体戦優勝、上記小山君の本年度全道選手権優勝など、輝かしい実績にふれながらの先輩たちの励ましに、学生からは「北大囲碁部の全日本学生囲碁選手権大会における成績は、ここ数年間4～5位と健闘し続けており、選手の棋力も着実に向上しているので、今年こそ立命館大学、早稲田大学に継ぐ3位入賞（国立大学法人のトップ）を果たしたい」との力強い決意が表明されました。

（北大方円会）



壁に貼られた「檄」と前年の北大時報掲載記事

■ 研修

研修名：平成24年度北海道地区国立大学法人事務情報化講習会（Access 初級編・クエリ編・中級編）

開催期間・内容

初級編第1回 平成24年9月13日～平成24年9月14日

初級編第2回 平成24年11月19日～平成24年11月20日

情報セキュリティの基礎知識，Accessの概要について，基本操作，演習

クエリ編 平成24年10月19日

関数を使用したデータ管理，業務で利用されるクエリの作成

中級編 平成24年12月19日～平成24年12月21日

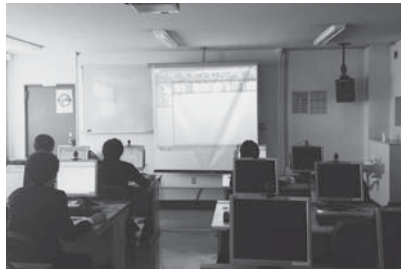
フォームを使ったデータの登録・加工，加工したデータを使ったレポートの作成，モジュール作成，プログラミング演習

開催場所：情報基盤センター南館

研修目的：Accessを利用して業務システムのデータを活用するための知識，並びに基本的な情報セキュリティ等の知識を習得することを目的とする。



初級編の様子



中級編の様子



(情報環境推進本部情報推進課)

研修名：平成24年度北海道地区国立大学法人等学生支援担当職員SD研修

開催期間：平成24年12月11日～平成24年12月12日

開催場所：高等教育推進機構大会議室

研修目的：学生指導，学生支援及び学生サービス業務を適正かつ円滑に処理するために必要な基本的知識，対応能力等を習得することにより，学生支援担当事務職員としての資質の向上を図ることを目的とする。

内容等：平成20年度から本研修を開催しており，平成22年度から道内の国立大学・国立高等専門学校職員も受講対象としている。今回は前年度に引き続き，テーマを「クレーム対応力向上」として，窓口・電話・メール対応における留意点のほか，組織としてのクレーム対応やクレームを予測すること等について，身近な事例やグループ毎のロールプレイを多く取り入れ，より実践的な内容で実施した。終了後のアンケートでは，研修内容が理解しやすかった，今後仕事をしていく上で役立つとの回答が多く寄せられ，好評であった。



研修の様子



村田幸彦学務部長から修了証書の授与

(学務部学生支援課)

■ 諸会議の開催状況

役員会（平成24年12月11日）

協議事項・学内共同教育研究施設（時限付き施設）の今後の措置について

- ・博士課程教育リーディングプログラムに受け入れる外国人留学生に係る検定料の不徴収について
- ・就業規則関連規程の一部改正について

報告事項・平成24年度国立大学法人施設整備費補助事業（予備費使用分）について

- ・部局等の第2期中期目標・中期計画の前半3年間の進捗状況について
-

教育研究評議会（平成24年12月19日）

議 題・総長選考会議委員の選出について

- ・学内共同教育研究施設（時限付き施設）の今後の措置について
- ・教育・研究従事者に対する改正労働契約法の対応について
- ・博士課程教育リーディングプログラムに受け入れる外国人留学生に係る検定料の不徴収について
- ・非正規職員の雇用年数等の見直しについて

報告事項・全学運用教員の措置について

- ・平成24年度国立大学法人施設整備費補助事業（予備費使用分）について
 - ・世界大学ランキングについて
-

役員会（平成24年12月25日）

議 案・教育・研究従事者に対する改正労働契約法の対応について

- ・学内共同教育研究施設（時限付き施設）の今後の措置について
- ・博士課程教育リーディングプログラムに受け入れる外国人留学生に係る検定料の不徴収について
- ・就業規則関連規程の一部改正について
- ・非正規職員の雇用年数等の見直しについて

報告事項・夏季操業調整契約（自家発電対応型）の報告及び冬季操業調整契約（自家発電対応型）の実施について

※規程の制定、改廃については、「学内規程」欄に掲載しております。

■ 学内規程

国立大学法人北海道大学契約職員就業規則の一部を改正する規則

(平成25年1月1日海大達第1号)

国立大学法人北海道大学短時間勤務職員就業規則の一部を改正する規則

(平成25年1月1日海大達第2号)

国立大学法人北海道大学特任教員就業規則の一部を改正する規則

(平成25年1月1日海大達第3号)

国立大学法人北海道大学職員労働時間、休憩、休日及び休暇規程の一部を改正する規程

(平成25年1月1日海大達第4号)

平成25年1月から就業管理システムにより職員の出退勤等を管理することに伴い、所要の改正を行ったものです。

国立大学法人北海道大学寄附金規則の一部を改正する規則

(平成25年1月1日海大達第5号)

本学から取引停止の措置を受けている期間中の者からの寄附金の受入れを制限することに伴い、所要の改正を行ったものです。

国立大学法人北海道大学借上宿舍等規程の一部を改正する規程

(平成25年1月1日海大達第6号)

本学が借り上げていた民間の宿泊施設について、稼働状況を勘案した結果、平成24年12月末日をもって廃止することとされたことに伴い、所要の改正を行うとともに、併せて規定の整備を行ったものです。

国立大学法人北海道大学自家用電気工作物保安規程の一部を改正する規程

(平成25年1月7日海大達第7号)

平成24年5月24日付けで移転した北方生物圏フィールド科学センター水圏ステーション室蘭臨海実験所について、移転前の同実験所施設が本規程の適用を受けないこととするに伴い、所要の改正を行ったものです。(平成24年11月1日適用)

国立大学法人北海道大学水産学部等の施設に係る自家用電気工作物保安規程の一部を改正する規程

(平成25年1月7日海大達第8号)

平成24年5月24日付けで移転した北方生物圏フィールド科学センター水圏ステーション室蘭臨海実験所について、移転前の同実験所施設を、7キロボルト以下で受電し、受電電力の容量が100キロボルトアンペア以下の需要設備を有する施設として設置すること、並びに水産学部等の施設の自家用電気工作物の保安業務のための巡視、点検等及び測定基準を改めることに伴い、所要の改正を行ったものです。(平成24年11月1日適用)

■表敬訪問

国内

年月日	来訪者
24.12.4	北海道大学ワンダーフォーゲル部
24.12.11	財務省 主計局次長 岡本 薫明 氏
24.12.13	日本銀行 札幌支店長 高田 恭介 氏



北海道大学ワンダーフォーゲル部 (中央)



財務省主計局次長 岡本 薫明 氏
(右から2人目)



日本銀行札幌支店長 高田 恭介 氏 (右側)

(総務企画部広報課)

海外

年月日	来訪者	来訪目的
24.12.7	イエジン獣医大学 (ミャンマー) Tin Ngwe 学長	両大学の交流の可能性に関する懇談
24.12.11	駐日バングラデシュ人民共和国 Masud Bin Momen 大使	両国の交流に関する懇談
24.12.17	インドネシア技術評価応用庁 Deputy Chairman Ridwan Djamaluddin 氏	本学サステイナビリティ学教育研究センターでの講演会のため



イエジン獣医大学 Tin Ngwe 学長 (右側)



駐日バングラデシュ人民共和国
Masud Bin Momen 大使 (中央右)



インドネシア技術評価応用庁
Deputy Chairman Ridwan Djamaluddin 氏 (中央右)

(国際本部国際連携課)

■人事

平成24年12月14日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【助教】 (任期満了)	木 村 恵	大学院医学研究科助教

平成24年12月15日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【部局長】 大学院法学研究科長 法学部長 (期間：平成26年12月14日まで)	亘 理 格	大学院法学研究科教授
【副研究科長】 大学院法学研究科副研究科長 (期間：平成26年12月14日まで)	鈴 木 賢	大学院法学研究科附属高等法政教育研究センター教授
【教育研究評議会評議員】 (期間：平成26年12月14日まで)	鈴 木 賢	大学院法学研究科附属高等法政教育研究センター教授

平成24年12月31日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【准教授】 (辞職)	折 館 伸 彦	大学院医学研究科准教授
【係員】 (辞職)	南 美 江 勝 谷 剛	附属図書館利用支援課付 北海道大学病院医事課医療支援室
【技術職員等】 (辞職)	岡 田 明 子 吉 田 結	北海道大学病院看護部看護師 北海道大学病院看護部看護師
【嘱託職員】 (辞職)	宮 川 真理子	総務企画部人事課厚生労務室付

平成25年1月1日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【教授】 大学院農学研究院教授 大学院農学研究院教授 大学院工学研究院教授 大学院工学研究院教授 (転出) 公立大学法人札幌市立大学看護学部教授	井 上 京 佐 野 雄 三 小 崎 完 平 沖 敏 文 河原田 まり子	大学院農学研究院准教授 大学院農学研究院講師 大学院工学研究院准教授 大学院工学研究院准教授 大学院保健科学研究院教授
【准教授】 大学院医学研究科准教授 大学院地球環境科学研究院准教授 大学院地球環境科学研究院准教授 大学院地球環境科学研究院准教授 大学院理学研究院准教授 大学院理学研究院准教授	大 泉 聡 史 梅 澤 大 樹 佐 藤 友 徳 根 岸 淳二郎 沢 田 健 武 貞 正 樹	北海道大学病院講師 大学院地球環境科学研究院助教 採用 採用 大学院理学研究院講師 大学院理学研究院講師

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
大学院理学研究院准教授 大学院薬学研究院准教授 北方生物圏フィールド科学センター准教授 触媒化学研究センター准教授 (転出) 北海道教育大学教育学部旭川校准教授	松 永 悟 明 堺 谷 政 弘 若 松 純 一 小 山 靖 人 永 山 昌 史	大学院理学研究院講師 採用 大学院農学研究院准教授 東京工業大学大学院理工学研究科助教 大学院工学研究院助教
【講師】 大学院農学研究院講師 大学院農学研究院講師 北海道大学病院講師	高 橋 公 咲 東 山 寛 今 野 哲	大学院農学研究院助教 大学院農学研究院助教 大学院医学研究科講師
【助教】 大学院医学研究科助教 大学院農学研究院助教 北海道大学病院助教	松 井 雄一郎 内 田 義 崇 倉 島 庸	採用 採用 採用
【係長】 工学系事務部経理課係長	飯 田 純 二	施設部施設企画課付係長
【主任】 財務部調達課付主任 施設部施設企画課主任	桑 村 厚 志 中 庭 智 宏	北方生物圏フィールド科学センター係長 施設部施設整備課主任
【係員】 環境科学事務部	野 崎 なつみ	北海道大学病院総務課
【技術職員等】 水産学部附属練習船おしよろ丸二等機関士 水産学部附属練習船うしお丸一等機関士 北海道大学病院看護部看護師 (転出) 独立行政法人国立病院機構北海道医療センター看護師	沢 中 和 也 志 村 順 平 山 浦 里 奈 大 塚 博 明	水産学部附属練習船うしお丸一等機関士 水産学部附属練習船おしよろ丸二等機関士 採用 北海道大学病院看護部看護師

新任部局長等紹介

平成24年12月15日付

法学研究科長・法学部長に



わたり 巨理 格 教授

平成24年12月14日限りで松久三四彦法学研究科長・法学部長が任期満了となり、その後任として巨理 格教授が発令されました。

任期は、平成26年12月14日までです。

略 歴

生 年 月 日 昭和28年 4 月 7 日
 昭和52年 3 月 東北大学法学部卒業
 昭和54年 3 月 東北大学大学院法学研究科博士前期課程修了
 昭和54年 4 月 東北大学法学部助手
 昭和59年 4 月 立命館大学法学部助教授
 平成 3 年 4 月 立命館大学法学部教授
 平成 4 年 4 月 金沢大学法学部教授
 平成10年 4 月 北海道大学法学部教授
 平成12年 4 月 北海道大学大学院法学研究科教授
 平成15年 6 月 法学博士（東北大学）
 平成19年 4 月 北海道大学大学院公共政策学連携研究部教授
 平成22年 4 月 北海道大学大学院法学研究科教授
 平成22年12月 北海道大学大学院法学研究科副研究科長
 平成24年12月 北海道大学教育研究評議会評議員

新任教授紹介

平成25年1月1日付



農学研究院教授に

いのうえ たかし 井上 京 氏

環境資源学部地域環境学分野

生年月日

昭和35年 2 月 9 日

最終学歴

北海道大学大学院農学研究科修士課程修了(昭和60年 3 月)
 博士（農学）（北海道大学）

専門分野

土地改良学



農学研究院教授に

さの ゆうぞう 佐野 雄三 氏

環境資源学部森林資源科学分野

生年月日

昭和39年11月 4 日

最終学歴

北海道大学大学院農学研究科修士課程修了(平成 2 年 3 月)
 博士（農学）（北海道大学）

専門分野

木材科学



工学研究院教授に

こさき たもつ 小崎 完 氏

エネルギー環境システム部門
 エネルギー生産・環境システム分野

生年月日

昭和37年 4 月21日

最終学歴

北海道大学大学院工学研究科修士課程修了(昭和63年 3 月)
 博士（工学）（北海道大学）

専門分野

放射性廃棄物処理・処分，原子炉廃止措置，原子炉材料学



工学研究院教授に

ひらおき としふみ 平沖 敏文 氏

応用物理学部門凝縮系物理学分野

生年月日

昭和25年 3 月25日

最終学歴

北海道大学大学院理学研究科博士後期課程退学(昭和53年 3 月)
 理学博士（北海道大学）

専門分野

高分子物理学，核磁気共鳴

訃報

名誉教授 ^{ふじもと} 藤本 ^{せいいちろう} 征一郎 氏
(享年74歳)



名誉教授 藤本征一郎先生は平成24年11月24日にご逝去されました。先生は昭和38年3月に北海道大学医学部を卒業し、1年間の実地修練修了後、同39年4月に同産婦人科学講座に入局されました。昭和46年3月に医学博士の学位を取得し、同47年4月から同49年5月まで米国ミシガン州立大学及び米国ロックフェラー大学に留学し、生殖内分泌学の研究に従事されました。昭

和49年5月に北海道大学医学部附属病院講師、同60年8月に同大学医学部産婦人科学講座助教授に任ぜられ、同62年8月に教授に昇任し、平成14年3月の定年退官まで産婦人科学の教育、研究、臨床に従事されました。

教授在職中に、医学部附属病院分娩部部长、同輸血部部长、同病院長、北海道大学評議員などを歴任され、医学部及び同附属病院の運営、発展に尽力されました。

先生は人材育成と国際交流促進にリーダーシップを発揮され、先生の薫陶を受けた多くの産婦人科医が診療、研究に活躍しています。研究活動は多岐にわたり、胎児脳室周囲白質軟化症の機序解明、B型肝炎母児間垂直感染予防法の確立、妊婦甲状腺機能スクリーニング体制の確立、破水診断のための羊水中AFP測定キット開発など

に成果をあげられました。平成11年には「胎児染色体異常の出生前診断に関する総合的解析」の功績により、北海道医師会賞、北海道知事賞を受賞されました。一方で婦人科癌における傍大動脈リンパ節郭清の臨床的意義を明らかにし手術治療の発展に貢献されました。

退官後は、複数の病院の病院長を歴任され、地域医療に貢献されました。先生は平成24年4月から闘病生活を送られていましたが、11月に享年満74歳の人生を閉じられました。先生が開拓し、歩み続けてこられた若手の育成、地域医療への貢献、国際交流の促進への道を私ども後輩は力を併せて継承し歩んでいく所存です。ここに謹んでご冥福をお祈り致します。

(医学研究科・医学部)

名誉教授 ^{おんむら} 恩村 ^{ゆうた} 雄太 氏
(享年92歳)



名誉教授 恩村雄太先生は平成25年1月3日にご逝去されました。先生は大正11年3月4日に夕張に生まれ、昭和21年に北海道帝国大学医学部卒業後、直ちに同大学医学部病理学第2講座の副手になられ、同27年には北海道大学医学部助教授に、同40年には教授に就任されました。昭和50年には医学部附属病院に病理部を立ち上げられ、同57年からは医療技術短大主事を兼務されました。昭和52年からは北海道大学評議員を8年間、また同年から医学

部長を4年間務められました。現在医学部の正面にある「北海道大学医学部」と記されている門標は、当時の恩村医学部長の書によるものです。

先生の研究活動は肝疾患、中枢神経系疾患を中心に多岐にわたり、特に肝脳疾患の病理と重金属代謝異常との関係については先駆的な実験を行い、肝循環異常の重要性を明らかにし、肝硬変症、肝癌、胆汁うっ滞の病態を解明されました。また、中枢神経系ウイルス感染症やエキノコックス症の病理解剖を数多く手掛け臨床病理学に貢献されました。これらの先生の数々のお仕事は、特に正確無比な病理解剖の技術、抜群の記憶力と膨大な医学知識に基づく深い病態解析に基盤をおくものです。これらの業績により昭和51年には北海道医師会賞（実験的肝脳疾患の研究）を受賞され、また在職中の大きな功績に対しては平成8年に勲二等瑞宝章を叙勲されています。

先生は教育者としては学生一人一人を大切にされており、名前と卒業期の記憶の正確さは有名でした。学生にとっても先生のドイツ語による詳細な講義は、記憶に残る講義であり退官後も語り継がれています。また大学の教官としては、常に公私の区別の重要性を説かれておりました。

退官後は、学生時代から嗜まれた茶道を学生に指導するとともに、「社団法人茶道裏千家淡交会」の活動に精力的に取り組まれ理事を務められた後、平成15年からは顧問に就任されていました。昨年秋まではご自宅にてご趣味の草花の手入れに汗かく日々を送られていましたが、昨年11月上旬に体調を崩され本年1月3日享年92歳の人生に幕を閉じられました。ここに謹んで哀悼の意を捧げるとともに、先生のご冥福をお祈り致します。

(医学研究科・医学部)

編集メモ

●部局ニュースでは、薬学・工学・水産の各部局が、所属学生の専門やニーズに合わせて実施したキャリア・就職支援事業の記事を紹介しています。

また、全学の学生を対象にした「企業研究セミナー」が、12月から1月にかけてクラーク会館で開催されました。今年度は495社の企業が参加し、多くの学生が業界・企業研究の場として



積極的に活用し、就職活動の本格化を感じさせました。

セミナー最終日となった1月17日（木）においても、真剣な眼差しで企業の担当者の説明を聞く学生の姿が見られ、企業の方に北大生の印象をお聞きすると、「目がキラキラしており、質問もたくさん寄せられるなど意欲的な学生が多い」と話してくださいました。

●NHK教育テレビの人気科学番組「すイエんサー」の特別シリーズ「北海道大学からの挑戦状！」が、1月22日（火）に本学工学部において番組初の公開収録を行い、その模様が2月26日（火）、3月5日（火）19：25～19：55の2回にわたって全国放送されます。再放送は、それぞれ3月2日（土）、3月9日（土）9：30～10：00です。学生の活躍をぜひご覧ください！



2011. 9. 14 野幌森林公園

北の息吹 **69** アケボノソウ (*Swertia bimaculata*)

本種もリンドウではないリンドウ科の一種で、1 m 近くまでになる茎から長く伸びた枝のあちこちに、数個ずつかたまった2 cm未満の白い花を沢山つける。遠目にはあまり目立つ花ではないが、近寄って見ると花弁状の裂片に描かれた模様の美しさに驚かされる。裂片の中央部には緑色の密腺が2個並んでおり、その先端部に黒っぽい点が散在するが、この様子を夜明けの

空の星に見立てて和名が付けられたという。北海道中部から九州まで分布し、東北では普通に見られる花だが、道内では限られた場所にしかないようである。山形では6弁や7弁の豪華な花も多いが、私が道内で見たのは4弁と5弁のものだけである。

前理事・副学長 岡田 尚武

北大時報 ① No.706 平成25年1月発行

北海道大学総務企画部広報課 〒060-0808 札幌市北区北8条西5丁目
TEL : (011) 706-2610 / FAX : (011) 706-4870 / E-mail : kouhou@jimuhokudai.ac.jp
北大時報はインターネットでもご覧いただけます。http://www.hokudai.ac.jp/bureau/populi/